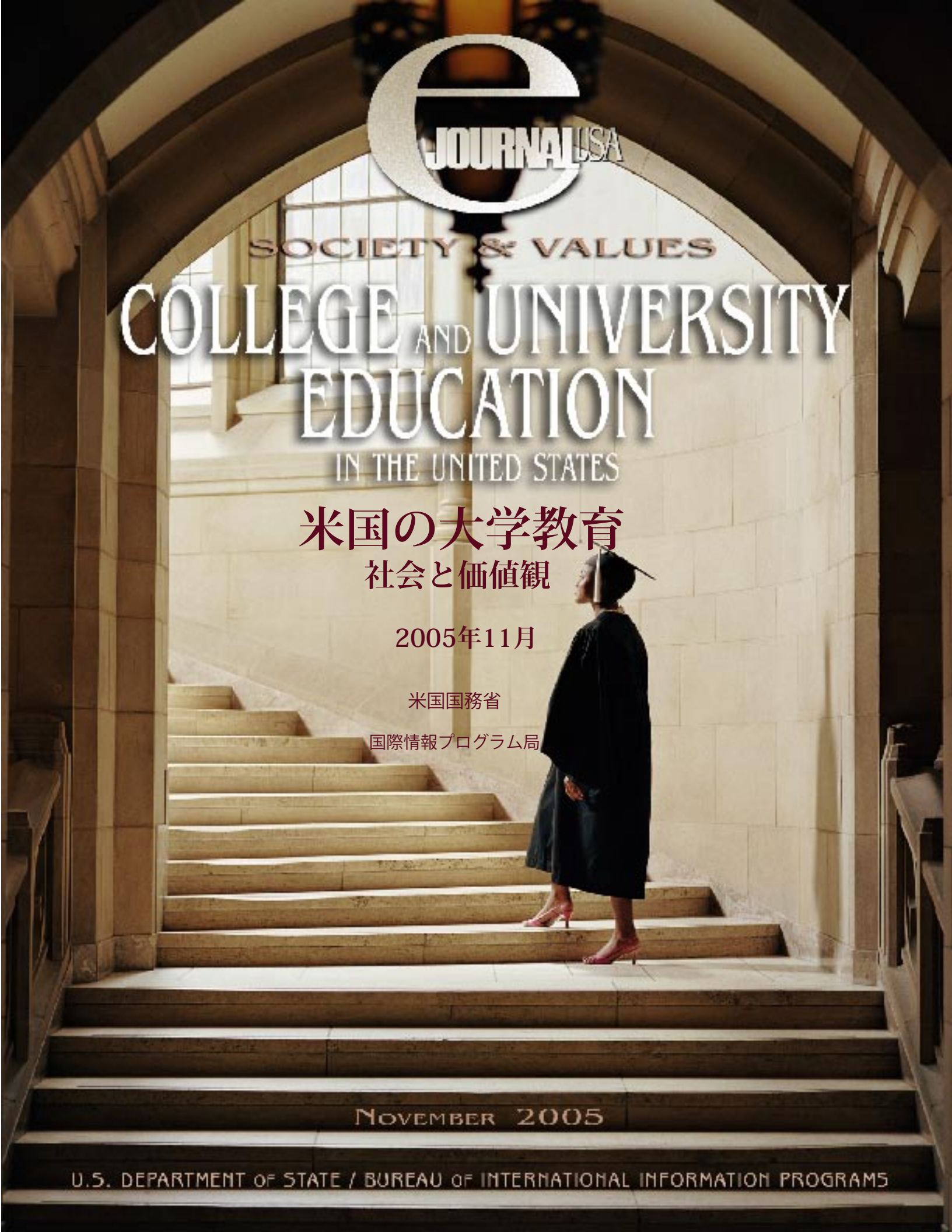

eJOURNAL USA
SOCIETY & VALUES
COLLEGE AND UNIVERSITY EDUCATION
IN THE UNITED STATES
米国の大学教育
社会と価値観
2005年11月
米国国務省
国際情報プログラム局
NOVEMBER 2005
U.S. DEPARTMENT OF STATE / BUREAU OF INTERNATIONAL INFORMATION PROGRAMS

社会と価値観

編集長 .....Michael Seidenstricker
副編集長 ..... Robin L. Yeager
共同編集者..... Michael Jay Friedman
Rosalie Targonski
参考資料担当 ..... Mary Ann Gamble
Kathy Spiegel
表紙デザイン ..... Diane Woolverton

写真編集.....Ann Monroe Jacobs
発行人.....Judith S. Siegel
編集主任.....George Clack
編集主幹.....Richard W. Huckaby
制作.....Christian Larson
制作補佐.....Chloe Ellis
編集委員.....Alexander C. Feldman
Jeremy F. Curtin
Kathleen R. Davis
Kara Galles

表紙写真：Ryan McVay/Taxi/Getty Images

米国国務省の国際情報プログラム局は、eJournal USAのロゴ名で５種類の電子ジャーナル（「Economic Perspectives（経済展望）」「Global Issues（グローバルな課題）」「Issues of Democracy （民主主義の問題）」「U.S. Foreign Policy Agenda（米国外交政策アジェンダ）」「U.S. Society & Values（米国の社会と価値観）」）を発行し、米国や国際社会、そして米国の社会や価値観、考えや様々な制度が直面する主要な問題について検証しています。５種類のジャーナルはそれぞれ、発行巻数（出版された年の番号）と、号数（１年間に発行された各号の番号）別に目録に掲載されます。

最新号は毎月、まず英語で発行され、２～４週間後にフランス語、ポルトガル語、スペイン語、ロシア語版が発行されます。必要に応じて、アラビア語や中国語など他の言語の翻訳版が発行される場合もあります。

ジャーナルの中で提示された意見は、必ずしも米国政府の見解や政策を反映するものではありません。米国国務省は、ジャーナルがリンクするインターネット・サイトの内容、およびこれらのサイトへの継続的な利用の可能性について、一切の責任を負いません。各サイトについての責任は、サイトの発行者のみに帰属するものとします。ジャーナルに掲載される記事や写真、イラストは、著作権についての明記がない限り、米国以外での複製や翻訳を認めますが、明記されてあるものについては、ジャーナルに記載されている著作権保有者の許可を得なければなりません。

国際情報プログラム局は、http://usinfo.state.gov/journals/journals.htmで、ジャーナルの最新号とバックナンバーを数種類のデータ形式で提供するとともに、これから発行予定ジャーナルのリストを掲載しています。ご意見等は、最寄りの米国大使館、または下記の編集部までお寄せください。

Editor, eJournal USA: Society & Values
IIP/T/SV
U.S. Department of State
301 4th St. S.W.
Washington, D.C. 20547
United States of America
電子メール：ejvalues@state.gov

ごあいさつ

カレン・ヒューズ国務次官

eJournal USA 2005年11月号をお届けします。米国の高等教育に関心を持っていただき、ありがとうございます。米国は、研究と学習に最適の場所です。私の息子も昨年の秋に大学に入学しました。ですから、この時期、学生やご家族が、どんなに期待に満ちているか分かります。希望する専攻分野や、大学の規模にかかわらず、米国には無限ともいえる選択肢があります。このジャーナルが、皆さんの大学探しのきっかけとなることを願っております。

学術的機会に恵まれていることは、米国で学ぼうとする理由のひとつにすぎません。米国で学ぶ学生は、知的探求や政治的討論、宗教・芸術表現を行う自由に恵まれています。また、米国で学ぶことは、さまざまな国籍や文化を持つ学生たちの友好と相互理解を育む役割を果たしています。

米国の大学のほとんどは、留学生を受け入れることによる恩恵を受けています。2004-2005学年度には、190カ国、56万5000人を超える留学生が、米国のキャンパスで学びました。また、多くの米国の大学は、海外滞在・留学制度を通じて、学生が豊かな外国文化を体験し、視野を広げることを奨励しています。

皆さんが次世代の留学生として米国で学ぶ決意を固める上で、本号がお役に立つよう願っております。そして、皆さんを米国にお迎えする日をお待ちしております。

カレン・ヒューズ
広報文化・交流担当国務次官

序文

マーガレット・スペリングズ
教育長官

マーガレット・スペリングズ教育長官

米国の高等教育制度に関心をお持ちいただき、ありがとうございます。私たちは、次世代の世界の指導者を育てる米国の大学を誇りとしています。

毎年、世界中から何十万人もの留学生が米国にやってきます。留学生が独自の視点をもたらすことで、すべての学生の大学生活が豊かなものになります。

米国の高等教育制度は、他国の制度とは異なっています。米国の制度は地方への権限委譲が進んでおり、大規模な総合大学からコミュニティーカレッジ、そして職業・専門学校まで、非常に幅広い選択肢があります。米国教育省は、資金その他の面で高等教育支援していますが、中央の監督官庁としての機能は果たしていません。米国ではほとんどの大学が自治組織であり、高い独立性と自由を享受しています。

今年、私の長女が大学に入学しました。私にとって、娘が家を出るのは寂しいことでしたが、彼女の大学入学は、私の人生の中で最も誇りに思う出来事のひとつでもありました。どの親御さんにも、このような誇りを感じる機会が訪れることを願っています。米国教育省は、機会の拡大を最優先事項のひとつとしています。私たちは、学資援助を通じて、より多くの学生が高等教育を受ける夢を実現することに貢献すべく尽力しています。

最近、私は、高等教育の機会拡大に向けた国家戦略の策定について助言を行う新しい委員会を設置しました。経済のグローバル化が進んでいる今日、最も高い技能を備えた労働者が、最も条件の良い雇用を獲得します。現在、最も急速に成長している雇用のうち、およそ80％は、何らかの中等後教育を必要とするものです。従って、大学教育の重要性が、これまで以上に高まっています。

このジャーナルは、米国の高等教育における数々の機会を紹介するものです。この情報が皆様のお役に立つことを願っております。さらに詳しくは、ウェブサイトhttp://www.educationusa.state.gov　をご覧ください。

本号について

米国の大学は、種類が豊富で、カリキュラムや専攻分野もほぼ無限に存在しており、多様性、寛容、そして優秀性の追求という、この国の最大の長所を象徴している。このジャーナルは、海外からの留学生とその父母やアドバイザー向けに作成したものであり、米国の高等教育制度や米国の大学での学究生活・学生生活についての情報が記載されている。

化学の厳しい講座の受講、インターンシップによる職場での実習体験、遠隔学習やワールドワイド・ウェブでの拡張講座や情報提供を利用した豊かな教育体験、あるいは芸術的才能の追求など、米国の学生は、さまざまな分野で、自らの可能性をフルに発揮できる教育機関やカリキュラムを見つけることができる。

米国の高等教育制度は、全国的な制度が存在しないという点で、他のほとんどの諸国の制度と異なっている。アメリカ合衆国憲法では、特に連邦政府の機能と定められていない政府機能は、すべて各州に留保されるものと規定している。従って、大学およびその他の高等教育機関を設立、統治、および規制する責任は、主として各州にある。

各州は、教育機関の設置を認可するが、学校の認定をしたり、質を保証したりすることはない。教育機関の認定制度は、民間の非営利組織が運営している。この点については、別途囲み記事で詳述する。

このジャーナルには、米国の各種高等教育機関に関する説明に加えて、個々の大学の各種プログラムを紹介した記事、また「専攻」という概念、大学生活、そして米国式の授業に関する記事が掲載されている。記事の内容をさらに充実させるために、多くの写真やビデオを用いた。米国の高等教育制度における学校の選択、入学願書の提出、および学資に関する助言を求める学生のための情報も提供している。その中でも、最も役に立つ情報源としては、EducationUSAの教育相談センターとそのウェブサイト（http://educationusa.state.gov/）などが挙げられる。海外からの留学希望者は、必要な成績証明書などを入手・提出し、必要な試験を受けるために、願書提出期限の少なくとも 1 年前から手続きを始めることが望ましい。

eJournal USA：社会と価値観 の本号を作成する中で、私たちは、大学生活の体験が学生にとっていかに重要なものであるかを再認識した。私たちが話を聞いた人たちは、例外なく、自分や家族の出身校、あるいは現在家族が在籍している学校を取り上げてほしいと語った。このような母校への連帯感は、卒業後何年もたっている人たちにも見られ、大学での体験が、人格形成、知的挑戦、そして共通性の追求に果たす役割を再確認させてくれる。

米国の高等教育の全貌をできるだけ完全な形で紹介するために、このプロジェクトに情報および写真や記事を提供してくださった何十校もの大学や教育機関の熱心なご支持に、心から感謝している。しかしながら、そうした情報や写真の使用は、特定の学校あるいは組織を推薦するものではない。

このジャーナルは、米国国務省と同教育省の共同イニシアチブである「国際教育週間」（2005年11月14～19日）に合わせて作成された。このイニシアティブは、米国民をグローバルな環境で活動できるように教育するプログラムを促進するとともに、外国の未来の指導者が米国で学び、研究し、交流することを奨励するためのものである。

編集者一同

社会と価値観

米国国務省　2005年11月　第10巻　第２号
www.usinfo.state.gov/journals/journals.htm

米国の大学教育

i　ごあいさつ
カレン・P・ヒューズ広報・文化交流担当国務次官

ii　序文
マーガレット・スペリングズ教育長官

iii　本号について

各種教育機関

4　米国の公立大学
ミネソタ大学学長　ロバート・H・ブルーニンクス
一般的に、州立大学には数万人の学生が在籍しており、教科課程は何百にも上る。

6　大規模な私立研究大学とは？
エモリー大学学長　ジェームズ・W・ワグナー
私立大学は、民間資金を利用して、研究を新たな方向へ大胆に進めることができる。

8　米国のコミュニティーカレッジ - 多くの学生が選ぶ高等教育への入り口
全米コミュニティーカレッジ協会会長
ジョージ・R・ボッグズ
地元で学びたい学生や、学費を低く抑えたい学生にとっては、２年制大学は魅力的な選択肢である。

10　多様性の力 - 米国の高等教育における独立した部門
独立大学協議会会長　リチャード・エクマン
小規模な私立大学は、授業、および学生と教授陣の交流に重点を置く。

12　少数民族のための教育機関
アフリカ系米国人、ヒスパニック、アメリカン・インディアンなど、少数民族の学生に重点を置く教育機関もある。

14　「ブラウン」判決から50年 - なぜ伝統的黒人大学(HBCU)が今も重要なのか
スペルマン大学学長　ベバリー・ダニエル・テータム
アフリカ系米国人学生のアイデンティティーの再確認に、HBCUが果たす独自の役割を、教育者の立場から述べる。

16　宗教系大学
アメリカカトリック大学学長　デービッド・M・オコネル師
宗教系教育機関は、信仰を通じた学習の伝統が高等教育に「付加価値」をもたらすと考えている。

18　専門大学
米国国務省国際情報プログラム局専属ライター　マイケル・ジェイ・フリードマン
専門のカリキュラムを持つ学校の一例としては、芸術、経営、軍事訓練に特化した大学がある。
補足記事 - 大学のランキング、米国の「トップ」大学、経営学と工学の優秀大学、アイビーリーグの大学、EducationUSA、国際教育週間

23 写真で見るカレッジ･ライフ

クローズアップ

28 ペンシルベニア大学国際関係プログラム
米国国務省国際情報プログラム局専属ライター　マイケル・ジェイ・フリードマン
国際的な仕事に就けるよう学生を訓練する学際的プログラム。
補足記事 - 米国の大学認定制度について

30 留学生が見つけた新しい故郷とグローバルな目的
アールハム･カレッジ元広報担当ディレクター　リチャード・ホールデン
アフガニスタンやケニアからの留学生が、その体験と大志を語る。

32 社会奉仕
米国国務省国際情報プログラム局専属ライター　ロビン・L・イエーガー
多くの大学では、学生にサービスラーニングその他のボランティア活動の機会を与えて、学生に実務的学習の機会を提供しながら地域社会を支援するとともに、奉仕の精神を奨励している。

35 ７つのスナップショット - 教育機会の実例
国務省の外国人職員のグループが、米国の大学７校で留学生に与えられる機会について評価したレポートの概要。

制度の説明

39 大学の専攻科目の選択
国際教育研究所大学進学サービス担当ディレクター　リンダ・トバシュ
大学生の正しい専攻の選び方について専門家が実用的な助言を行う。
補足記事 - 専攻の選択とキャリアの選択、学年度、学士号取得要件、役立つウェブサイト

47 学部の授業体験
国際教育研究所大学進学サービス担当ディレクター　リンダ・トバシュ

ONLINE VIDEO

オンライン・ビデオ
異邦人：留学生の体験

留学生が米国に来た最初の数カ月に経験した出来事を紹介した、ダートマス大学制作のビデオの抜粋。
http://www.usinfo.state.gov/journals/itsv/1105/ijse/ijse1105.htm

大学生に期待されることや、さまざまな大学の課程を著者が紹介する。
補足記事 - 成績評価

50 米国の大学で学ぶためにかかる費用
米国で学ぶための資金を調達しようとする留学生のための情報源
補足記事 - 授業料その他納付金と、大学生活のための総費用図 - 大学生の予算サンプル

53 学資援助の可能性
在ハンブルク（ドイツ）米国総領事館文化担当専門官　マルティナ・シュルツ
学資援助制度は、学部生より大学院生向けのものが多い。

54 留学生を歓迎する米国のコミュニティーカレッジ
全米コミュニティーカレッジ協会コミュニティーカレッジ・タイムズ紙　ジェニファー・バーチャム
コミュニティーカレッジ・タイムズ紙の記事を転載。当然、コミュニティーカレッジを重点的に説明しているが、「歓迎」のメッセージは、米国のあらゆる高等教育機関で学ぶすべての留学生に向けられている。
補足記事 - 留学生アドバイザーとは？

56 参考文献一覧

58 役立つウェブサイト

各種教育機関

米国の公立大学

ロバート・H・ブルーニンクス

Elliott Minor, AP/WWP
賞を受けた自作のロボット飛行機の制作に励むアリゾナ大学工学部の学生たち。

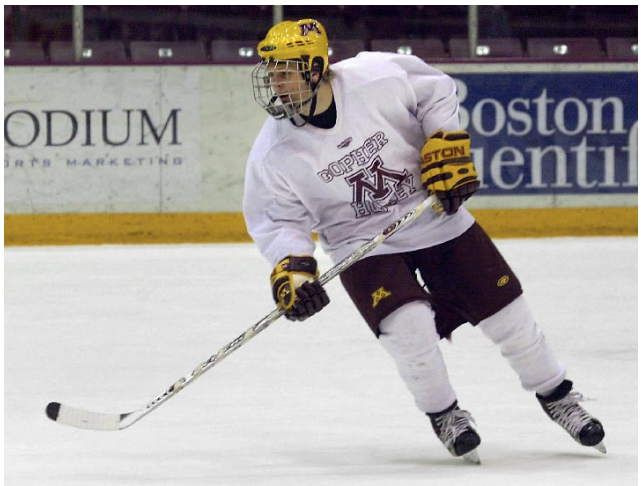
一般的に、公立（州立）大学には数万人の学生が在籍しており、数百の専攻分野で学位を授与している。この記事では、ミネソタ大学のロバート・H・ブルーニンクス学長が、大規模な州立大学の組織と財務構造について、またそうした大学における留学生や海外からの研究者が得ることができる機会について説明する。ブルーニンクス氏は、2002年から同大学長を務めており、J・ウィリアム・フルブライト奨学金理事会の理事でもある。

米国の大規模な公立大学は州立大学とも呼ばれ、それぞれが所在する州と密接に結び付いているとともに、その支援を受けている。州立大学は、高等教育の中心として高く評価される、刺激的で活気に満ちた場であり、それぞれが独自の伝統と、地域社会とのつながりを持っている。また、全米および世界各地から才能ある人々を引き付ける場所でもある。

一般的に、この種の公立大学には数万人の学生が在籍している。米国で大学院および専門学位の大半、そして学部の学位の多くを授与するのは、公立大学である。また、幅広いカリキュラムを提供している点も、大規模な公立大学に共通している。私が学長を務めるミネソタ大学を例に取ると、ツインシティーズ校の学生数は５万人、数百種類の学位を取得することができ、神経学、移植手術、経済学、政治学、材料科学、ナノテクノロジー、農学、天然資源などさまざまな分野でリーダーとなっている。

公立大学は、地域の経済的・文化的発展および都市開発に極めて重要な役割を果たし、ミネソタ大学をはじめ多くの公立大学は、研究を通じて知識と技術の向上に深く関与している。こうした大学は、米国有数の研究大学であり、世界各地の国際的なプログラムに大きく関わっている場合も多い。19世紀後半に連邦政府が取った一連の措置により、各州に大学設立のための資金が付与された。連邦政府の寛大な援助によって生まれた公立大学は、技術移転、農業支援、初等・中等学校との交流、州・地方政府の政策策定者との交流などの形で、それぞれが属する州で奉仕活動を行い、地域社会に関わっていくことを義務付けられている。

研究活動がどの程度熱心に行われているかは、大学によって大きく異なる。公立大学の超有名校が厳しい競争を勝ち抜いて獲得する研究助成金や研究契約の総額は、概して年間数億ドルに上る。また、州から受ける支援の程度にも大きな開きがある。大きな研究予算を持つ州立大学の場合、通常、予算の10～30％が地元



Janet Hostetter, AP/WWP
アイスホッケーはミネソタ大学で盛んな数多くのスポーツのひとつである。

の州から提供される。残りの予算は、大学の授業料、助成金・契約金、および寄付金で賄われる。

大規模な州立大学の場合、その財務構造上、多くの大学院生は、その大学が受ける研究助成金や研究契約に関連する研究助手手当という形で、学資援助を受ける。多くの公立大学では、国際的な交流や研究を支援する資金の調達額を増やそうとしているが、留学生に対する学資援助は、上記の研究助成金以外は、非常に限られている。特に学部生が研究助手を務めることは一般的でないため、公立大学では、学士号取得を目指す学部留学生のための奨学金はかなり限定されている。

大規模州立大学の所在地は、小さな町から大都会まで、さまざまである。州内各地に複数のキャンパスを持つ大学も多い。また、複数の公立大学組織を持つ州も多い。

公立大学は、理事会が運営し、州政府に対してさまざまな報告義務を負う。他の多くの国々と異なり、米国の公立大学には連邦政府の教育長官に対する報告義務はなく、高等教育政策は主に各州に委任されている。ただし、重要な例外として、連邦政府の学資援助、および全米科学財団や国立衛生研究所など多くの連邦政府機関を通じた研究資金は、連邦政府が提供する。

米国の公立大学の慣習には、諸外国とはかなり異なるものもある。州の援助を受ける公立大学でも、学生は従来から教育費の一部を、授業料および諸費用という形で負担してきており、その負担額は増加している。今日では、平均的な学生は、教育費を支払うために学資ローンを受けている。また、公立大学の各種プロジェクト、奨学金、教職員の雇用にかかる費用を賄うために、民間の資金調達の果たす役割が大きくなっている。最後に、大学対抗のスポーツ競技は学生、卒業生、そして一般市民の注目を集めており、大学にとってスポーツイベントが資金源のひとつとなっている。

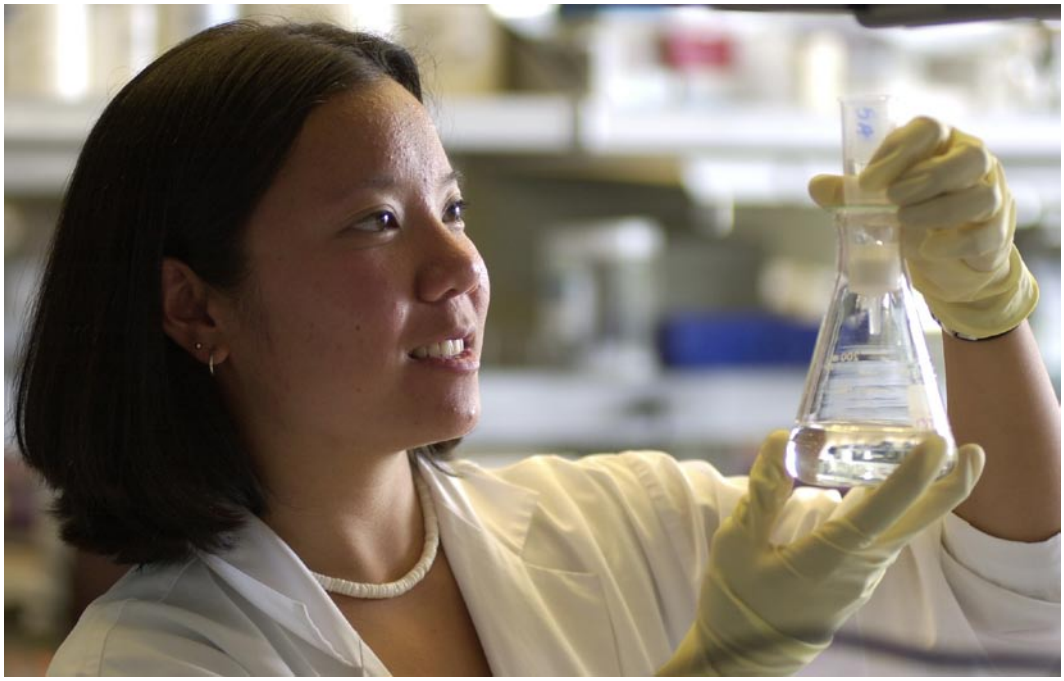
多くの場合、米国の大学の中で留学生や海外からの研究者の比率が最も高いのは、大規模州立大学である。ミネソタ大学には、およそ130カ国から、4500人以上の留学生・研究者が在籍している。同大学は個人・学業に関する問題についてのカウンセリングやアドバイス、米国および大学の文化に関するオリエンテーション、移民・ビザ手続きのアドバイス、第２言語としての英語講座のほか、異文化間の相互理解とコミュニケーションなどのさまざまなテーマを扱うプログラムやワークショップ等の支援サービスを留学生に提供している。ほかの多くの州立大学も、同様のプログラムを用意して、時に複雑でわかりにくい大学の運営制度や就学規則について学生の理解を助けようとしているが、こうしたサービスの内容は学校によって異なる。

他国の大学との競争が厳しくなっているため、どのような一流大学であっても、海外の学生が関心を持つのは当たり前と考えることはできなくなっている。その結果、米国の公立大学は、世界中から最も優秀な学生を集めることに重点を置くようになっている。やる気と自主性があり、最先端の知識と創造的な研究に触れることを望む学生の皆さんには、米国の公立大学で得ることができる豊富な機会について調べてみることをお勧めする。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

大規模な私立研究大学とは？

ジェームズ・W・ワグナー



カリフォルニア州スタンフォード大学医学部の皮膚科研究室で研究にいそしむ学生。 Linda A. Cicero/Stanford News Service

ジョージア州アトランタ市のエモリー大学学長ジェームズ・W・ワグナーによると、私立の研究大学は公立大学に比べて財政面での柔軟性に恵まれている。従って、私立大学の方が特徴のあるカリキュラムを作りやすい。

米国の高等教育制度の長所のひとつは、その多様性である。学生数わずか数百人の小さな大学から、数万人の大規模な州立大学まで、また職業教育課程を持つ２年制コミュニティーカレッジから私立の研究大学まで、米国の高等教育は幅広いニーズに対応している。学生にとってどの大学が適しているかは、主に、思い描いているキャリア、財政的制約、そして地理的条件によって決まる。すなわち、本人が何を天職と感じ、何を学びたいか、どの程度の学資を出せるか、そして地元から離れた大学へ行きたいかどうかによる。最終的に最も重要なのは、学生の将来の希望に沿った学校を選ぶことである。

米国で最大規模の大学上位100校のうち92校は、公立大学すなわち州立大学（連邦政府ではなく、50州のいずれかが援助する大学）である。全米の大学生の77％が公立大学で学んでいる。しかし、各種の大学ランキングを見ると、ほとんどの場合、上位25校のうち３～４校を除くすべてが、有名私立大学である。従って、米国の私立研究大学は、米国のみならず全世界で、特に高い評価を受けていると言える。

しかし、「私立研究大学」とは、具体的にどのような大学なのか。またこうした大学はなぜそれほど魅力的なのだろうか。

私立研究大学は、法律、医学、工学などの分野で専門職に就くための訓練を行うほか、博士号取得のための教育を行う。教授陣は、授業に加えて、研究に多くの時間を費やす。事実、私立研究大学では、教授の報酬や昇進を決める際に、知的能力、学識、そして研究の質が、授業の質と同様に重要である。しかし、公立大学でも専門教育と博士課程の教育を行い、学識と研究を重視している。それでは、私立大学はどこが違うのか。

Adam Hunger, AP/WWP

マサチューセッツ工科大学のロボット工学のプロジェクトで強度と敏しょう性をテストする留学生たち。

John Bazemore, AP/WWP

キャンパスのさわやかな空気の中で勉強するエモリー大学の学生（ジョージア州アトランタ市）。

ひとつには、私立大学の方が、概して財政面での柔軟性に恵まれている点が挙げられる。私立大学は、資金調達で州議会に依存することはなく、卒業生、慈善団体、科学分野その他の専門職団体が、各種プログラムのコスト、奨学金、建物の建設費、教授の雇用にかかる費用を賄って大学を財政面で支援している。こうした資金源は公立大学においても増えているが、特に私立大学の場合には、このような資金のおかげでニーズにすばやく対応し、新しい方向に大胆に研究を進める能力を高め、専門の研究センターや独自のカリキュラムを構築することができる。学生にとっては、このような柔軟性があるために、ほとんど研究を奨励されないような分野でも、研究を続けるチャンスが与えられることになる。

同様に、私立大学は公の財源に依存しないことによって、外国に「拠点」を作りやすくなっている。例えば、ジョージア州民が、ロンドンでの研究センター設立に彼らの税金が使われることを承認するとは思えないが、私立のエモリー大学がそのようなセンターを作ることは、おそらく歓迎するだろう。一般に、私立大学の方が、国際的な研究・サービス・教育拠点を開設しやすい。一例を挙げると、エモリー大学は、アフリカ各地、コーカサス地域、およびアジアで、国際衛生に関するプログラムを、またヨーロッパやアジア各地では、経営学のプログラムを実施している。こうした活動は、米国の学生や教授が国の内外を問わず、他国のもっとも優秀な人材と関わるチャンスとなる。

最後に、私立の研究大学の大半は、公立の大学に比べて規模が小さいため、豊富な資源と人間味のある規模という好ましい条件の双方を満たすことができる。公立、私立を問わず、米国の一流大学は学習と研究に関して大きな可能性を秘めているが、私立大学の小規模なキャンパスでは、概して学部同士が距離的に近いため、分野を越えた研究者の交流が容易である。最も重要な発見が、国境を超えた協働によって実現している世界においては、キャンパス内で、そしてキャンパスを超えた世界の隅々にまで至る協働関係を育み、強化することのできる能力が、私立大学の最大の魅力と言えるかもしれない。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

米国のコミュニティーカレッジ -
多くの学生が選ぶ高等教育への入り口

ジョージ・R・ボッグズ

美術の授業のために家の設計図を描くオーウェンズ・コミュニティーカレッジ（オハイオ州）の学生。 Michael Lehmkuhle, AP/WWP

２年制大学は、地域に密着した小規模なキャンパスで高等教育の第１歩を踏み出す機会を学生に提供しており、学費も４年制大学に比べて安い場合が多い。高等教育を受ける場としての魅力的選択肢のひとつであるコミュニティーカレッジの特徴について、全米コミュニティーカレッジ協会のジョージ・R・ボッグズ会長兼最高経営責任者が概説する。

コミュニティーカレッジは、米国における高等教育への入り口のひとつであり、これを選択する学生の数は増えている。コミュニティーカレッジは、学士課程４年間のうち最初の２年間の単位を、質の高い認定校で取得する機会を提供している。授業料が比較的安いため、学生は十分な支援を受けられる環境で学びながら、経費を節約することができる。また、準学士号取得や学位を必要としない職業に向けた訓練や、幅広い成人学習者向けの生涯教育・能力開発クラスを開講している。

コミュニティーカレッジは、米国の高等教育の中でも、最大かつ最も急速に成長している部門である。現在、全米各地に、地域の認定を受けたコミュニティーカレッジが1200校近くあり、1100万人以上の学生（全米の学部生のおよそ46％に相当）が在籍している。

留学生にとっても、米国のコミュニティーカレッジには、英語能力を高めたり、米国の地域社会の中でアメリカ文化を学んだりする機会があるなど、数多くの利点がある。

そのうちの一例として、次を挙げることができる。

写真提供　Central Piedmont Community College
コミュニティーカレッジの生活にいそしむセントラル・ピードモント・コミュニティーカレッジ（ノースカロライナ州）の学生たち。

安い授業料。４年制大学に比べると授業料がかなり安い（４年制大学では年間１万2000ドルから２万ドル以上であるのに対し、コミュニティーカレッジは年間5000ドル前後）。

４年制大学への編入が容易。米国では、２年制大学と４年制大学の間に、「２＋２」システムと呼ばれる効率的な「アーティキュレーション（単位認定）」制度がある。ほとんどのコミュニティーカレッジは、４年制大学とアーティキュレーション協定を結び、コミュニティーカレッジで取得した単位が、４年制の学士課程で認められるようになっている。

認定校。米国のコミュニティーカレッジも、４年制単科大学も、主な総合大学も、すべて同じ機関の認定を受けている。従って、コミュニティーカレッジで取得した単位が、そのまま４年制大学で認められる。

幅広いカリキュラム。コミュニティーカレッジには、多数の専攻科目があり、経営学、情報科学、工学、保健科学など人気の分野も多い。

第２言語としての英語講座。ほとんどのコミュニティーカレッジは、英語能力の異なる学生たちがいずれも勉学で成功を収められるよう、さまざまなレベルの英語講座と多様な支援サービスを提供している。

サポート体制の整った学習環境。コミュニティーカレッジでは、クラスの人数が少なく、平均して１クラス30人未満であるため、教授が学生を個人的に知り、サポートすることができる。学生の学習パターンやニーズを支援することを目的とした環境の中で、個々の学生の成功を目指すことに重点が置かれている。学生のための支援サービスには、個別指導、学習相談、ライティング実習室、留学生クラブ、留学生サービスセンターなどがある。

多様性。米国のコミュニティーカレッジの学生は、文化的にも民族的にも多様なバックグラウンドを持つ。米国の社会を反映するこうした多様性をたたえ、支援するさまざまなクラブや活動がある。

米国文化の体験。コミュニティーカレッジは地域社会を反映し、それに応えるものであるため、地元との結び付きが強い傾向にある。そのため、留学生は、米国人と交流し、米国文化を体験する非常に多くの機会に恵まれる。

多様な立地と規模。米国の他の教育機関と同様、コミュニティーカレッジにもさまざまな学校がある。大都市にあり、複数のキャンパスを持つ大規模なコミュニティーカレッジもあれば、田舎にあって規模が小さく、学生数の少ない学校もある。米国の人口の90％が、コミュニティーカレッジに通学可能な範囲に暮らしている。

著名な卒業生。米国のコミュニティーカレッジの卒業生には、アーノルド・シュワルツェネガー・カリフォルニア州知事、パリス・グレンデニング元メリーランド州知事、米航空宇宙局(NASA)でスペースシャトル船長を務めたアイリーン・コリンズ、映画「スター・ウォーズ」シリーズをのプロデューサー兼監督を務めたジョージ・ルーカス、俳優のトム・ハンクスやクリント・イーストウッド、ファッション・デザイナーのカルバン・クライン、ヒトゲノムの研究者クレーグ・ベンター、そしてリチャード・カルモナ米公衆衛生局長らがいる。

米国のコミュニティーカレッジについての詳しい情報は、http://www.CC-USA.org、または各地のEducationUSA相談センターで入手できる*A Guide to Studying at U.S. Community Colleges*を参照のこと。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

多様性の力
米国の高等教育における独立した部門

リチャード・エクマン

Nancy Palmieri, AP/WWP
マサチューセッツ州のマウント・ホリヨーク大学で卒業を祝うジンバブエからの留学生。

私立の４年制大学は、主として学部の学生のために、多様な教育体験を提供している。独立大学協議会のリチャード・エクマン会長が、私立大学と公立大学との違いを説明する。

米国の高等教育の最も顕著な特徴は、その多様性である。連邦政府が大学のカリキュラムや教授法を管理することはなく、州政府もあまり深く関与しない。しかし、米国の高等教育の中でも、教育理念、プログラム、伝統などに最も大きな多様性が見られるのは、「独立大学」あるいは「私立大学」の部門である。この部門に属する小規模な学校はおよそ600校あり、その中には、米国で最も古い伝統を誇る学校も多い。

この多様性の例として、次のようなものがある。ペンシルベニア州のアーシナス大学には、新入生を人文科学と社会科学のさまざまな文献に触れさせるための学際的なプログラムがある。ノースカロライナ州のウォーレン・ウィルソン大学では、学生全員が大学運営に関連する肉体労働に携わることを義務付けており、これが同大学の教育理念の重要な要素となっている。ウィスコンシン州のノースランド大学は、環境にやさしい運営を実現すべく多大な努力を払っている。ウェストバージニア州のオルダーソン・ブローダス大学は、学生の大半が同州丘陵地帯のごく小さな町の出身であり、その多くが科学や医学の道に進んでいる。インディアナ州のアールハム大学は、クエーカー教徒が創設した学校で、今も、主な意思決定手段として、学内の全メンバーのコンセンサスを用いている。ペンシルベニア州の女子大学、シーダー・クレスト大学は、女性は科学が得意ではないという固定観念に反して、大勢の理科系卒業生を送り出している。

こうしたおよそ600校の独立大学は、それぞれ異なる特徴を持つ一方で、共通点も多い。

●いずれも比較的規模が小さく、学生数が3000人を超えることはめったにない。

●ほとんど、あるいはすべての講座が学士課程であり、大学院の講座はほとんどない。

●教授陣は主として教えることに専念する。教授の大半は、研究も行うが、それは教える義務に比べて二義的であり、彼らは教室内外で学生たちと過ごす時間が長い。

● 対話型・参加型の教授法を採用している。

●教育の過程の多くは教室外で行われるということを認識して

Patricia McDonnell, AP/WWP

マサチューセッツ州のウェルズリー大学で24時間シェークスピア朗読会に参加する学生たちと教授。

Kevin G. Reeves, AP/WWP

アルゼンチンの音楽家たちと共演するオベリン大学（オハイオ州）の音楽専攻の学生たち。充実した音楽科で知られる同大は、初めて女性やアフリカ系米国人を受け入れ、学位を与えた大学のひとつとしても有名である。

いるため、学生同士あるいは学生と教授の交流の機会が豊富にあり、それが教育における正課併行活動の重要な部分とされている。

●基盤とする価値観を明確に打ち出している。それは、その学校を創設した宗派の価値観である場合もある（その宗派が学校運営に関与する度合いが低くなっている場合には、そうした価値観がある程度反映されている）。また、メリーランド州とニューメキシコ州にキャンパスのあるセント・ジョンズ大学をはじめとする、古典の名著を学生に多数読ませる「グレート・ブックス・カレッジ」や、ウォーレン・ウィルソン大学やケンタッキー州のベレア大学のように、学生が勉学に加えて、大学のための労働を割り当てられる「ワーク・カレッジ」など、独自の教育理念を反映している場合もある。

●どのような職業訓練が必要かにかかわらず、人文科学の勉強をすることが、社会に出てから責任ある市民となるために不可欠である、という方針を持っている。

これらの大学に代表される高等教育の手法は、極めて高い効果を発揮している。例えば、学位取得に関する統計データを見ると、小規模な私立大学は、大規模な州立大学に比べ、学位取得率が高い。しかも、この差異は、最も優秀な学生だけでなく、中等学校での成績や学力評価試験（ＳＡＴ）（http://www.collegeboard.com）の成績があまり良くなかった学生の間でも見られる。また、これらの大学における学位取得率の高さは、大学進学率が低いとされることもある社会経済層（家族の中で初めて大学へ進学した世代である学生、フルタイムで働きながら授業を取っている学生、少数民族の学生など）にも見ることができる。

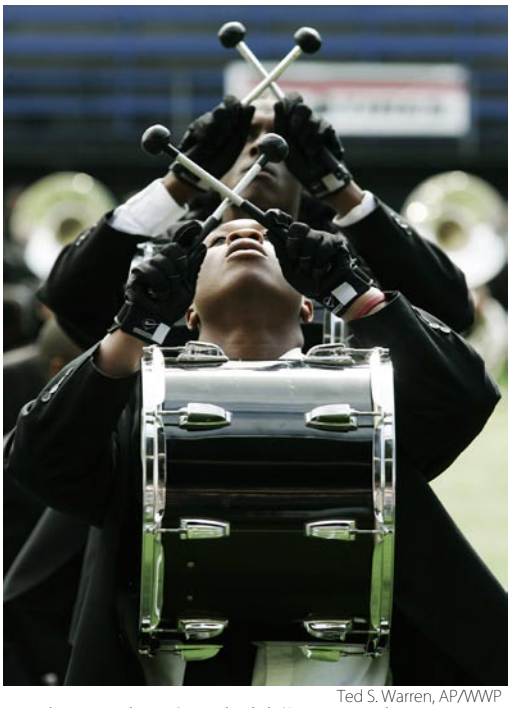
小規模な私立大学の教育が他に比べて効果的である理由のひとつは、「参加型学習」を実践しているからである。数百校の大学が参加している「学生の参加度に関する全国調査」を創設したジョージ・クーによると、大学で成功を収められるかどうかは、教授を良く知ること、課外活動に参加すること、地域に密着したインターンシップで働くこと、そして、口頭による発表や多くのレポート提出など能動的な教授法を多用した授業に出席すること、といった要素と密接な相関性がある。これらは、大きな大学より、小さな大学で実現しやすい要素である。

小規模な独立大学は、大都市、小都市、農村地域を問わず、全米各地に存在する。これらの大学は、さまざまな経歴を持つ学生、そしてキャンパスでの討論に、異なる才能や見方を提供することのできる学生を歓迎している。外国で育った学生は、貴重な存在と見なされる（ただし、授業は、ほとんどすべて英語で行われる）。

詳しくは、各大学のウェブサイトを参照。独立大学協議会のウェブサイト（http://www.cic.org/）からほとんどのサイトへリンクできる。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

少数民族のための教育機関



Ted S. Warren, AP/WWP
ルイジアナ州のグランブリング州立大学のマーチング・バンドは、陽気な演奏で全国的に高く評価されている。

本稿は、下記に挙げるウェブサイトなどの資料を基に作成したものであり、３つの少数民族（アフリカ系米国人、ヒスパニック、およびアメリカン・インディアン）の学生を対象とする大学に関する情報を提供している。

「少数民族のための教育機関(Minority Serving Institution)」とは、州立大学、私立大学、宗教系大学、人文科学系大学、コミュニティーカレッジなど各種の大学の中で、特に少数民族のニーズへの対応に重点を置いている大学である。これらの大学は、人口統計学上の特定のグループに属する学生を受け入れることを伝統とし、あるいは義務付けられているが、多くの場合、少数民族以外の学生も受け入れている。そして、共通の利害と関心を基盤とする組織を築いている。そのようなグループとしては、伝統的黒人大学(HBCU)、ヒスパニック大学協会(HACU)、およびアメリカン・インディアン部族の大学の協会であるアメリカン・インディアン高等教育コンソーシアム(AIHEC)の３つが挙げられる。このほかに、少数民族のための大学を援助する団体が多数存在する。

伝統的黒人大学

「伝統的黒人大学に関するホワイトハウス・イニシアチブ」では、次のように記述している。

「伝統的黒人大学(HBCU)は、アフリカ系アメリカ人の社会だけでなく、米国全体にとって、優れた業績と大きな誇りをもたらしている。1965年修正高等教育法は、HBCUを次のように定義している。　『・・・1964年より前に設立された、伝統的に黒人を受け入れている大学で、その主な使命が過去、現在を通じてアフリカ系アメリカ人の教育であり、提供される教育の質に関して信頼できる機関であると（教育）長官が判断した、全国的に認められた認定機関または協会によって認定されているか、またはそのような機関または協会によって、認定に向けて相当な進展をみたと判断された大学』」

ジョージ・W・ブッシュ大統領は、2005年９月11～17日を「全米伝統的黒人大学週間」に指定する大統領声明で、米国の伝統的黒人大学の教育レベルが高いこと、新しい世代を成功に導くための教育していること、そして平等な教育を目指す米国の公

約達成に貢献していることを称賛した。大統領は「こうした貴重な教育機関は、高い教育レベルを維持し、すべての米国民に平等な教育の機会を提供することによって、米国民全員がその可能性を十分に発揮し、繁栄と希望に満ちた将来を目指すことができるようにするために貢献した」とし、「われわれは、誰もがアメリカンドリームを実現できるような社会の創造に向けて努力を続ける」と述べた。全米で105校ある伝統的黒人大学の大半は、南東部諸州、コロンビア特別区、およびバージン諸島にある。その内訳は、公立の４年制大学40校、公立の２年制大学11校、私立の４年制大学49校、および私立の２年制大学５校である。「全米伝統的黒人大学週間」に関する特集記事に、さらに詳しい情報が記載されている（http://usinfo.state.gov/scv/Archive/2005/Sep/26-256508.html）。

ヒスパニック大学協会

ヒスパニック大学協会(HACU)は、1986年に設立された。創立メンバーは18校だが、現在は、米国、プエルトリコ、中南米、お

写真提供　College of Sante Fe

ニューメキシコ州にあるヒスパニック教育機関サンタフェ・カレッジでフィットネス・インストラクターの指導を受ける学生たち。

よびスペインでヒスパニックの高等教育振興に力を入れる400校以上の大学が加盟している。米国内のHACU加盟校の数は、全米の高等教育機関の10％未満にすぎないが、これらのHACU加盟校に在籍するヒスパニック系学生は、全米のヒスパニック系学生の４分の３以上を占める。HACUは、ヒスパニックのための教育機関（ＨＳＩ）を代表する唯一の全国的な教育団体である。205校あるＨＳＩでは、ヒスパニック系学生が全体の25％以上を占める。その他のHACU加盟校では、その比率が25％未満である。詳しくは、http://www.hacu.net/hacu/Default_EN.aspを参照。

部族大学に関するホワイトハウス･イニシアチブ

ブッシュ大統領は、アメリカン･インディアンの社会において部族大学が重要な役割を果たしていることを認識し、2002年７月３日、部族大学に関する大統領令13270に署名した。この大統領令は、部族大学に関する大統領諮問委員会および部族大学に関するホワイトハウス・イニシアチブを創設するものであった。大統領は、次のように述べた。

部族大学は、かけがえのない言語と文化の伝統の維持に貢献している。同時に、言うまでもなく、何千人もの学生に質の高い教育を提供し、必要な職業訓練をはじめ、インディアン地域の経済開発の手段を提供している。（中略）部族大学に通う学生も含め、すべての米国民は、優れた教育を受ける資格がある。

米国には、連邦政府の承認を受けた部族大学が34校ある。部族大学は、主として中西部および南西部にあり、フルタイムおよびパートタイムの学生を合わせて、およそ３万人の学生がいる。これらの大学は、200以上の分野で、２年制の準学士号を付与しており、一部には、学士号・修士号を提供している大学もある。また、200種の職業教育認定プログラムも提供している。部族大学は、アメリカ先住民族出身の学生しか受け入れていないが、米国の高等教育の特殊な側面を理解する上で役に立つ存在である。詳しくは、http://www.whitehouse.gov/news/releases/2002/07/20020703-16.htmlを参照。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

写真提供　Office of the President, Haskell Indian Nation University

カンザス州のハスケル・インディアン・ネーション大学で、パレード用の車を飾り付ける学生たち。

「ブラウン」判決から50年 -
なぜ伝統的黒人大学が今も重要なのか

ベバリー・ダニエル・テータム

授業の討論で意見を述べる学生。

写真提供　Spelman College

スペルマン大学（ジョージア州アトランタ市）のベバリー・ダニエル・テータム学長が、アフリカ系アメリカ人学生のアイデンティティーを確認し、彼らが、多様な背景と視点を持つ学生たちと出会う機会を提供する上で、伝統的黒人大学の果たす役割について語る。テータム学長の著書には、"Why Are All the Black Kids Sitting Together in the Cafeteria?" and Other Conversations about Race（Basic Books, 2003）がある。

私は、1954年にフロリダ州タラハシー市で生まれた。最高裁判所が「ブラウン対教育委員会」訴訟で、「分離すれども平等」という、学校における人種分離の原則を違法とする判決を下してから、わずか４カ月後であった。父は、タラハシーにあるフロリダＡ＆Ｍ大学の美術学部で教鞭を取っていた。フロリダ州立大学で博士号を取ることを望んでいたのだが、1954年のフロリダ州では、黒人が大学院に入ることはできなかった。そこで、父は、列車でペンシルベニア州へ行き、1957年にペンシルベニア州立大学で博士号を取得した。その１年後、父は、マサチューセッツ州ブリッジウォーター市のブリッジウォーター州立大学で、初の黒人教授となり、私はそこで育った。今日、ブリッジウォーター州立大学は、同校史上初の有色人種学長を迎えている。また2004年２月には、黒人女性である私が、フロリダ州立大学主催の高等教育会議で開会のスピーチをした。いずれも、1954年には想像もできなかったことである。

私は、長年にわたり、圧倒的に白人の多い教育機関で、人種差別について教えてきた教育者として、また現在は、最も古い伝統的黒人女子大学であるスペルマン大学の第９代学長として、「ブラウン対教育委員会」訴訟の意義を、新しいレンズを通して理解することができる。多くの伝統的黒人大学と同様に、スペルマン大学も、以前は黒人学生を受け入れていなかった、白人学生が大多数を占める大学と、新たに競争をしなければならなくなった。しかし、競争の激化がきっかけとなり、スペルマン大学では重要

寮の部屋でくつろぐスペルマン大学の学生たち。　写真提供　Spelman College

な改善が実現した。ブラウン判決の後、教授たちは研究・出版活動を活発にすることを強く奨励され、また奨学金のための新たな資金源が作られた。寄付金を増すための資金調達活動の成功によって、財政が安定し、新しい寮や校舎が建設され、現在では、毎年、525人の入学定員に対して、4000人もの優秀な若い女性が出願する大学となっている。

スペルマン大学のような伝統的黒人大学が、今も重要性を持つだけでなく、多くの優秀な黒人学生の第１志望校となっているのはなぜだろうか。志望大学の選択には、本人のアイデンティティー、すなわち、自分をどのように見ているか、今の自分がどのような人間であるか、そして将来どのような人間になりたいかが反映される。学生たちは、自分自身が強く反映されていると実感できる環境、自らを教育機関における中心的な存在として見ることのできる場所に引き付けられる。

私は数年前に、圧倒的に白人の多い地域社会で育った、黒人大学の学生の人種的アイデンティティーに関する研究の一環として、伝統的黒人大学を選んだ学生たちのインタビューを行った。ある若い女性は、黒人大学での体験について、「キャンパスを歩いていて、『この場所は私のために作られたのだ』と感じるのは、とても嬉しいことです」と語った。米国で、黒人女性がそのように語ることのできる場所は、そうたくさんは存在しない。大学の選択における、アイデンティティーの確認の重要性を、過小評価することはできない。

今日、ほとんどの大学は、1954年に比べて、かなり多様性が高まっているが、大学は依然として、すべての学生の知力と指導力の可能性を最大限に引き出すような、真に包括的な環境を作るための基本原則を理解する努力を続けている。それは、教育の各段階で効果的な学習環境に欠かすことのできない、アイデンティティーの確認、地域社会の構築、そして指導力の育成、という３つの要素である。

こうした基本原則を実行に移すためには、「この環境は誰を反映しているか」、「誰が全体像から欠けているか」、「地域社会の構築、また相違を超えた対話の奨励のために、どのような機会が存在するか」、「多様性の中で指導力を磨くために、学生たちがどのような形で関与しているか」というようなことを、定期的に検討する必要がある。

私は、人種関係の専門家として、なぜスペルマン大学のような「同質的」な教育機関を選んだのか、とよく聞かれる。言うまでもなく、この質問は、誤った前提に基づいている。本校の学生は、人種的には97％が「黒人」に分類されるが、実際にはかなり多様であり、全米各地および多くの外国から、そして都市部の黒人居住地域だけでなく、白人の多い郊外や農村部からも集まっている。アフリカ各地出身の学生がおり、多様な体験と視点を持つ女性たちの存在は、多くの対話の機会につながっている。有色人種である若い人たちの人生の発達過程において、「グループ内」の対話が、「グループ間」の対話と同じように、また時にはそれ以上に重要性を持つ時期がある。そして、伝統的黒人大学という環境の中でも、その両方を実現する機会を作ることが可能である。

私たちの多くは、すべての学生が高い基準を満たすための機会と刺激を得ることのできる大学、というビジョンを持っている。それは、グループ同士の公平かつ公正な関係を特徴とする、多民族コミュニティーというビジョンである。また、学生たちに、批判的な思考、スピーチ、作文、そして定量的論理的思考という手段を与えることによって、知的な発達を促進するだけでなく、すべての学生に、多様な社会に効果的に参加するために必要な技能と体験を提供する教育というビジョンである。このような理想的な教育環境は、米国社会はもちろん、私の知る限りほかには、大きな規模で存在したことはない。しかし、このビジョンは、将来の青写真である。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

宗教系大学

デービッド・M・オコネル

ワシントンＤＣのアメリカカトリック大学の静かな環境で勉強する学生。 Chris Greenberg/Catholic University of America

.

米国の宗教系大学は、いずれも、独自の方法で宗教と学問を結び付けている。本稿では、「宗教系大学の将来に関するハーバード大学会議」で発表をした、アメリカカトリック大学学長のデービッド・M・オコネル神父が、宗教系大学がもたらした高等教育の「付加価値」についてその見解を述べる。これに続き、他の宗教系大学の建学の理念を示して、これらの大学が取るその他のアプローチの一部を紹介する。特定の大学の具体的な方針や理念について詳しくは、直接各大学にお問い合わせいただきたい。ここに記載する情報は、読者に情報源を提供することを目的とするものであり、特定の教義や教科課程を奨励または支持するものではない。

学生勧誘の競争が激しくなる中で、米国の大学は、それぞれの独自性と価値を実証しなければならなくなっている。どの大学も、「教育の質の高さ」そして特定の分野で「最も優れたプログラム」を提供することを宣伝するが、それ以外に、何が、「他に差をつける特徴」となるのだろうか。宗教系大学は、非宗教的な大学と異なり、信仰がそうした特徴であると考えている。

大学が、特定の宗教あるいは信仰の影響を直接受けているということは、その大学が（１）学問の世界において他と異なる独自性、ならびに（２）信仰を通じて高等教育に目的意識に基づいた貢献をしているという信念、を持っているというメッセージを、非宗教的な学問の世界に伝えるものである。

教育は、理性を通じて人間の経験を解明する。教育は、知性を啓発する。そのために、宗教的な教育は、理性と信仰の神という観点から人間の経験を明らかにし、知性と魂を啓発する。宗教的な教育を通じて、私たちは、理性的な知性によって理解できると同時に、より深いレベルで、信仰する心と精神にとって意味を持つ真実に出会う。私は、以前、「宗教とは、主に事実の問題ではなく、意味の問題である」という文章を読んだことがある。

宗教系大学は、理性と信仰の両方を、個別に提供するのではなく、ひとつの統合された真実の、別個であるが関連する２つの構成要素として提供することを目指す。米国で最も優秀な、広く認められている高等教育機関のいくつかが、何らかの信仰の宗派を起源としていることは興味深い。しかしながら、何らかの理由で、時の経過とともに、学術活動においてこうした宗教的な側面の重要性が減少し、その結果、高等教育においては、純粋に非宗教的なモデル／アプローチと、宗教的なモデル／アプローチの２種類が発達した。

Darron Cummings, AP/WWP

全米女子バスケットボール大会で、練習の合間にチームメートと談笑する、西インド諸島セントビンセント出身の、南部バプテスト系ベイラー大学（テキサス州）の学生。

学生やその親が宗教系大学を選ぶ場合、明確な宗教的伝統に基づく明確な宗教的アイデンティティーと使命を持つ教育機関を選ぶのである。そうした伝統は、大学およびその運営と活動全体に浸透しているべきであり、教室にも、キャンパスの学生生活にも、明確に表れているべきである。教職員は、その使命を果たすべく全力で努力すべきであり、学術活動には実質的な価値がほとんどないかのようにただ受け入れているだけはいけない。ある教育機関が真に宗教的である場合には、その宗教系大学とその使命によって高等教育に「付加価値」がもたらされること、そしてその付加価値が人々の関心を引き、人々が真に求めるものを独自に提供することによって彼らを引き付ける結果となっていることは、キャンパス内外の誰の目にも明らかである。それは、彼らが受ける教育と人生に影響を及ぼすものである。宗教系大学は、そうした大学が提供するものを求める人々に対して、自らが宗教的でありながら学問的にも優れていることを売り込むことができれば、長期的な存続し、最終的には、米国の高等教育の特質である真の多様性の促進につながる使命を達成することができる。

米国を代表するカトリック系大学である、ワシントンＤＣのアメリカカトリック大学は、まさにこの理念を貫いている。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

キャンベル大学

ノースカロライナ州にある南部バプテスト（プロテスタント）系のキャンベル大学は、学生が、身体と知性と精神の完全性（批判力も含む）を特徴とする統合されたクリスチャンとしての人格を形成し、知的・文化的・宗教的伝統の理解し、肉体を管理し、そして自分が人々と共に住み、働く世界と社会を敏感に認識するのを支援することを目標としている。同大学は、信仰生活と学究生活が対立することなく、神の恵みにより信仰によって生きることが、神が与えた人間の使命であると考えている。

ブランダイス大学

マサチューセッツ州のブランダイス大学は、最も新しい私立研究大学のひとつであるとともに、1948年に米国ユダヤ人社会の後援により設立された、全米で唯一の無宗派大学である。ブランダイス大学の教育理念によると、ユダヤ人社会の最も優れた倫理的・文化的価値観を体現するとともに、伝統的なユダヤ人社会の教育に対する熱意を通じて、米国に対する感謝を表現することを建学の目的としていた。あらゆる国籍、宗教、および政治的信念を持つ学生や教職員を受け入れることによって、ブランダイス大学は、文化的多様性、機会均等、そして表現の自由という米国の伝統を継承している。

パシフィック･ルーテル大学

ワシントン州にあるパシフィック･ルーテル大学は、プロテスタントであるルター派信者の開拓者によって創設された。同大学は、奉仕の人生のための教育、そしてカリキュラムの統合と能動的学習を重視した独特の教科課程に力を入れている。

ハートフォード神学校

コネティカット州にあるハートフォード神学校は、プロテスタントの会衆派によって設立された。今日、同校には、キリスト教教育プログラムに加えて、「イスラム教およびキリスト教・イスラム教関係研究のためのダンカン・ブラック・マクドナルド・センター」やイスラム教司祭の資格を得るための修士課程がある。指導者、学生、学者、および宗教機関が、今日の多宗教・多元的な世界を理解し、その中で信仰に忠実に生きていけるように指導すること、教育・研究および一般市民への情報提供、そして人々の対話を促進すること、また信仰や社会的環境の特質を確認しながら、相違点と類似点を公に探求することを通じて、神に奉仕することが、同校の使命である。

専門大学

マイケル・ジェイ・フリードマン

Matthew S. Gunby, AP/WWP

メリーランド州にある米国海軍士官学校の衛星設計講座の講師と学生たち。現在この講座では衛星２基を軌道に乗せている。

米国には、特定の分野に特化した大学がある。ここでは、芸術、ビジネス、あるいは軍事訓練を専門とするいくつかの大学を紹介する。筆者マイケル・ジェイ・フリードマンは、国務省国際情報プログラム局の専属ライターである。

米国の大学の大半では、幅広い分野のプログラムを提供しているが、中には、特定の分野に集中したカリキュラムを売り物にする大学もある。芸術、ビジネス、科学技術、軍事訓練など、特殊な分野を専門とするこれらの大学では、学生は特定の分野を集中して学ぶことが期待できる。こうしたアプローチは、誰にでも適しているわけではないが、学生によっては、自分に合った専門大学を選ぶことによって、特に秀でた才能を伸ばし、特定の技能を磨き、同様の才能を持つ仲間と交流する機会を得ることができる。ここに紹介する教育機関は、そうした大学のごく一部である。

入学が難しいことで知られるジュリアード音楽院（ニューヨーク市）は、音楽、舞踊、演劇でプロを目指す学生のための教育を行っている。同校には、米国43州および43カ国から学生が集まっており、卒業生には、クラシック音楽家のイツァーク・パールマン、ヨーヨー・マ、ピンカス・ズッカーマン、ジャズの大家セロニアス・モンクやウィントン・マルサリス、そしてソプラノのレオンティン・プライスから低音のジャズ・ボーカリスト、ニーナ・シモンまで多くの歌手など、著名な芸術家が大勢いる。ジュリアード音楽院は1971年以来、マンハッタンのリンカーン・センター内にある。同センターは、全米有数の総合芸術施設と見なされており、ジュリアードに加えて、メトロポリタン・オペラ、ニューヨーク交響楽団、ジャズ・アット・リンカーン・センター、およびその他８つの常駐芸術団体の本拠地となっている。

ジョージア州サバンナ市に本部のあるサバンナ・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン(SCAD)は、比較的新しい学校であるが、視覚・舞台芸術、デザイン、建築芸術、および美術・建築史のキャリアを目指す学生を教育している。これらの分野に重点を置くことによって、研究大学や人文科学系大学では通常あまり見られない専攻科目を提供することができる。SCADの学生は、広告デザイン、アニメーション、広告写真をはじめ、何十種類もの専門分野で学ぶことができる。こうした分野の職業を目指す学部生にとって、その専門分野を集中して学ぶ機会を与えられることは、極めて有意義である。SCADのポーラ・Ｓ・ウォレス学長は、「当校の学生は、独創的なビジョンと技術の習得をつむぎ合わせて、芸術的ビジョンを職業的な専門技術と実り多い将来へと変貌させている」と言う。

Peter Schaaf/The Julliard School

ビクター・ゴインズ芸術監督の指揮する、ジュリアード音楽院のカレッジ・ディビジョン・ジャズバンド

デザインや芸術の分野でキャリアを目指す学生は、SCADやジュリアードのような学校を選ぶ。一方、実業界や、成長する技術分野で成功するための技能を高めようとする学生も多い。そして、多くの場合、こうした学生たちは、年齢層が高く、すでに社会人となっている。このようなニーズを満たすのが、多数の「営利大学」である。例えば、インターネット上と、70カ所を超えるキャンパスで授業を行っているデブライ大学のような学校では、実践的な教育を行っている。こうした大学の教員は、学外でフルタイムの専門職に就きながら、パートタイムまたは臨時教員として教えている場合が多い。通常、この種の大学は、家庭や仕事を持つ学生の忙しいスケジュールに合わせ、夜間や週末に多くの授業を行い、パートタイムで大学に通うことを奨励している。コンピューター科学およびプログラミング、ビジネス、その他の技術関連分野が、特に人気がある。米国の雇用者の中には、勉強を継続する社員の授業料を一部またはすべて負担している企業もあり、人気が高い選択肢として、経営学の修士課程（ＭＢＡ）がある。

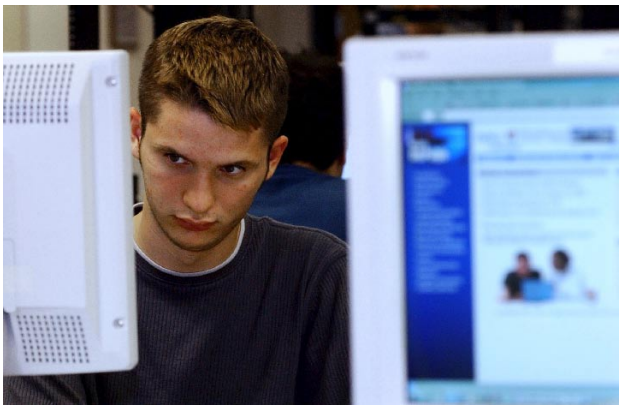
Courtesy Savannah College of Art and Design

ジョージア州にあるサバンナ・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザインのアニメーションの授業で、モデルのバーチャル・キャラクターを扱う教授と学生。

米国の大学の大半は、私立大学であるか、または州･地方政府の支援を受けている。しかし、米国陸軍士官学校、空軍士官学校、海軍士官学校、沿岸警備隊士官学校、および商船学校など米国の軍事学校は、連邦政府が運営している。

一例を挙げると、メリーランド州アナポリス市にある米国海軍士官学校は、極めて入学条件が厳しく、同校の学生（「海軍士官候補生」と呼ばれる）は、連邦議会の各議員、アメリカ合衆国大統領および副大統領、ならびに海軍長官によって任命される。海軍士官候補生は、年齢、健康状態、および学力の条件を満たしているとともに、未婚でなければならない。また、米国市民であることも条件のひとつであるが、国際関係および外国の海軍との関係促進のために、国防長官の指定する諸国から最高60人まで学生を受け入れることができる。1976年以降、女子の入学も認められており、2009年卒業予定の学生のうち約５分の１が女子である。

士官候補生は、授業料と食費を免除され、毎月奨学金が給付される。授業は、数学、工学、および航海技術に重点を置いたものであり、多くの学生は、海洋学、航空宇宙工学、造船学など、海洋関係の分野を専攻する。歴史、経済などを専攻する学生もいる。卒業生は、米国海軍少尉または海兵隊少尉に任官され、少なくとも６年間の兵役義務がある。



Steve Matteo, AP/WWP

デブライ大学のイリノイ州アディソン・キャンパスで、電気通信プロジェクトに取り組む学生。

この短い記事では、米国にはさまざまな中等後教育の選択肢があることを紹介したにすぎない。専門大学は、パートタイムの学生、家庭や仕事を持つ学生など、従来とは異なる学生たちのニーズに対応することによって、研究大学や人文科学系大学を補完する存在となっている。また、専門大学の焦点を絞ったカリキュラムは、目標を持って勉強する、優れた才能を持つ学生たちが、その才能を伸ばし、職業上の目標を追求するのを支援している。

大学のランキング

進学相談のカウンセラーは、大学を選ぶにあたり、教科課程、学校の規模、校風、費用、そして場所を考慮して、最も良い大学を選ぶよう助言する。米国の何千校もの大学の中から自分に合った大学を選ぶために役立つ参考資料のひとつに、各種大学格付けランキングがある。

● ピーターソンズとカプランの両社は、各種の教育関係書を発行している。ピーターソンズは、*Peterson's Guide to Competitive Colleges*という大学ガイドを、またカプランは、*Kaplan Publishing's Most Interesting Colleges*および*2005-The Unofficial Unbiased Guide to the 331 Most Interesting Colleges*を発行している。

● 主要新聞社の教育担当記者が、それぞれ推薦する大学のリストを作成している。ニューヨーク・タイムズ紙のベテラン教育担当記者ローレン・ポープによる*Loren Pope's Colleges That Change Lives, 40 Schools You Should Know About Even if You're Not a Straight-A Student*、元ニューヨーク・タイムズ紙教育欄編集者のエドワード・Ｂ・フィスクによる*Fiske Guide to Colleges*などである。ワシントン・ポスト紙の教育担当記者ジェイ・マシューズの*Harvard Schmarvard: Getting Beyond the Ivy League to the College That Is Best for You*の上位10大学リストは再読の価値がある。

● ペンシルベニア州のテンプルトン財団が、*The Templeton Guide: Colleges That Encourage Character Development*を発行している。

● 大学カウンセラーのベテラン、フレデリック・Ｅ・ラグによる*Rugg's Recommendations on the Colleges*は、大学を推薦するだけでなく、優良大学の優秀な学部を列記している。

● エール・デーリー・ニューズ紙の*The Insider's Guide to the Colleges 2005*は、学校経営者側の報告書ではなく、学生とのインタビューに基づいて、300校余りの大学における学生生活を検証して格付けを行っている。

主要雑誌も同様のランキングを発表しており、そのうち数誌が発行する「大学ランキング」特集号は大きな注目を集めている。最も影響力があり、広く引用されているもののひとつが、ＵＳニューズ・アンド・ワールド・レポート誌の"America's Best Colleges"と"America's Best Graduate Schools"という特集号である（http://www.usnews.com/usnews/home.htm）。

同誌は、全国的な有名大学（全米ランキング）、修士課程までの大学（地域別ランキング）、経営学課程、人文科学系大学、工学課程、総合大学（学生の50％以上が人文科学以外の分野で学んでいる、優れた学士課程のプログラムを持つ大学の地域別ランキング）など、多くのカテゴリーに分けて、大学のランキングと主な情報を提供している。

最後に、イリノイ大学アバナ・シャンペーン校の教育・社会科学図書館が提供するウェブサイトがある。このサイトから、多くのオンライン・ランキング・サービス、大学に関するその他の情報源、さらには各種ランキングの相対的な価値を検討するサイトなどにリンクすることができる。（http://www.library.uiuc.edu/edx/rankings.htm）

米国の「トップ」大学

ＵＳニューズ・アンド・ワールド・レポート誌によると、米国の「トップ」大学とされる100校には、公立（州立）大学もあれば、私立大学もある。全体としてみると、これらの学校は、教育の質の高さ、充実した研究室や図書館などの施設、そして卒業生や後援者の幅広いネットワークなどを特徴としており、さまざまな分野で、学士課程および修士・博士課程の学位を授与している。同誌が発表した2006年全米有名大学上位20校は、以下のとおりである。

1／2（同点）　ハーバード大学、プリンストン大学
3　エール大学
4　ペンシルバニア大学
5／6（同点）　デューク大学、スタンフォード大学
7／8（同点）　カリフォルニア工科大学、マサチューセッツ工科大学
9／10（同点）　コロンビア大学、ダートマス大学
11　ワシントン大学（セントルイス）
12　ノースウェスタン大学
13／14（同点）　コーネル大学、ジョンズ・ホプキンス大学
15／16（同点）　ブラウン大学、シカゴ大学
17　ライス大学
18／19（同点）　ノートルダム大学、バンダビルト大学
20／21（同点）　エモリー大学、カリフォルニア大学バークリー校

（http://www.usnews.com/usnews/edu/college/rankings/rankindex_brief.php）

経営学と工学の優秀大学

米国の大学の格付けや評価を行う組織は多いが、学校の分類基準、もとになる資料（例えば学校経営者による報告書）、あるいは優秀さの定義などが組織によって異なるため、各リストを一致させることは難しい。一例として、２つの分野における優秀校のリストを２つ挙げる。これらのリストは、異なる組織によるランキングを比較し、すべてのランキングの上位20校に含まれている大学をリストアップして作成した。ランキングによって大学の順位が異なるため、このリストでは大学名をアルファベット順に並べてある。

学部工学系プログラム

このリストは、ＵＳニューズ・アンド・ワールド・レポート誌の”Best Colleges 2005”のランキング、およびマサチューセッツ工科大学の大学院生らが「学生が聞いておけばよかったと思う質問」に答えるために作成しているStudentsReview.com によるランキングに基づいて作成した。

コーネル大学（ニューヨーク州）
ジョンズ・ホプキンス大学（メリーランド州）
マサチューセッツ工科大学（マサチューセッツ州）
ペンシルベニア州立大学（ペンシルベニア州）
パーデュー大学（インディアナ州）
レンセラー工科大学（ニューヨーク州）
ライス大学（テキサス州）
スタンフォード大学（カリフォルニア州）
テキサスＡ＆Ｍ大学カレッジ・ステーション校（テキサス州）
イリノイ大学アバナ・シャンペーン校（イリノイ州）
バージニア工科大学（バージニア州）

学部経営学プログラム

このリストは、ＵＳニューズ・アンド・ワールド・レポート

誌の”Best Colleges 2005”のランキング、ビジネス・ウィーク誌の2004年”Best Business Schools”のランキング（これは２年に１度発表される）、およびフォーブズ誌の2003年ビジネス・スクール・ランキング（その大学へ行くことによる投資回収率のランキング）をもとに作成したものである。

カーネギー・メロン大学（ペンシルベニア州）
コーネル大学（ニューヨーク州）
エモリー大学（ジョージア州）
マサチューセッツ工科大学（マサチューセッツ州）
ニューヨーク大学（ニューヨーク州）
ミシガン大学（ミシガン州）
ノースカロライナ大学チャペルヒル校（ノースカロライナ州）
ペンシルベニア大学（ペンシルベニア州）
テキサス大学オースティン校（テキサス州）
バージニア大学（バージニア州）

アイビー・リーグの大学

「アイビー・リーグ」とは、米国で最も古い歴史を持つ一流大学の中の８校のことである。この８大学は、同一リーグでスポーツの試合をし、スポーツ選手の学業成績に同等の水準を求める、という協定を結んでいる。米国で最も初期に創設されたこれらの大学は、古い校舎にツタ（アイビー）の絡まる、歴史と伝統を感じさせる立派なキャンパスを持つため、そのリーグ、そして各大学が「アイビー・リーグ」と呼ばれるようになった。アイビー・リーグの８大学は、ブラウン大学、コロンビア大学、コーネル大学、ダートマス大学、ハーバード大学、ペンシルベニア大学、プリンストン大学、およびエール大学であり、いずれも米国の一流校に数えられている。これらの大学と「アイビー・リーグ」の名前を聞くと、今日でも、米国の優れた高等教育のイメージが喚起される。

国際教育週間

EducationUSAとは、170カ国450カ所以上の相談・情報センターで構成される、米国務省教育文化局支援の国際ネットワークである。これらのセンターでは、米国における教育機会について、正確で、包括的・客観的な情報を適時提供し、また適格者にこうした機会の利用の仕方をアドバイスすることによって、世界各地で米国の高等教育の宣伝活動に積極的に取り組んでいる。

EducationUSAの相談センターには、専門のアドバイザーが勤務しており、その多くは、米国で学んだ経験のある人たちや、米国の高等教育および教育相談について、国務省認可の訓練を受けた人たちである。彼らは、面談、電話、電子メール、またはインターネットによって、年間およそ2500万人の留学希望者を支援している。

EducationUSA のアドバイザーは、留学希望者に、大学を選ぶための各段階で、豊富な情報とサービスを無料で提供する。アドバイザーは、米国のさまざまな大学の違いを理解しており、個人の教育・職業上のニーズに合った大学を選ぶための情報を提供することができる。入学許可が出るまでのプロセスを知っており、筆記試験、論文の書き方、推薦状などについてアドバイスをし、また奨学金に関する情報の入手も援助することができる。

EducationUSAのアドバイザーは、米国の移民法や安全保障上の要件について常に最新の情報を得ているため、学生ビザの申請や面接についても学生を指導することができる。多くのEducationUSAセンターでは、論文や履歴書の書き方を教えるワークショップ、出発前の準備、そして翻訳や書類の確認などの専門サービスを提供している。

最寄りのセンターについては、http://educationusa.state.gov/を参照。

国際教育週間は、世界各地で行われている国際教育と国際交流を祝うことを目的とする、米国国務省と教育省の共同イニシアチブであり、米国民をグローバルな環境に適応できるように教育し、未来の指導者と目される海外の人々が米国での研究・学習・交流に関心を持ってもらうことを目的とする各種プログラムを促進する活動の一環である。

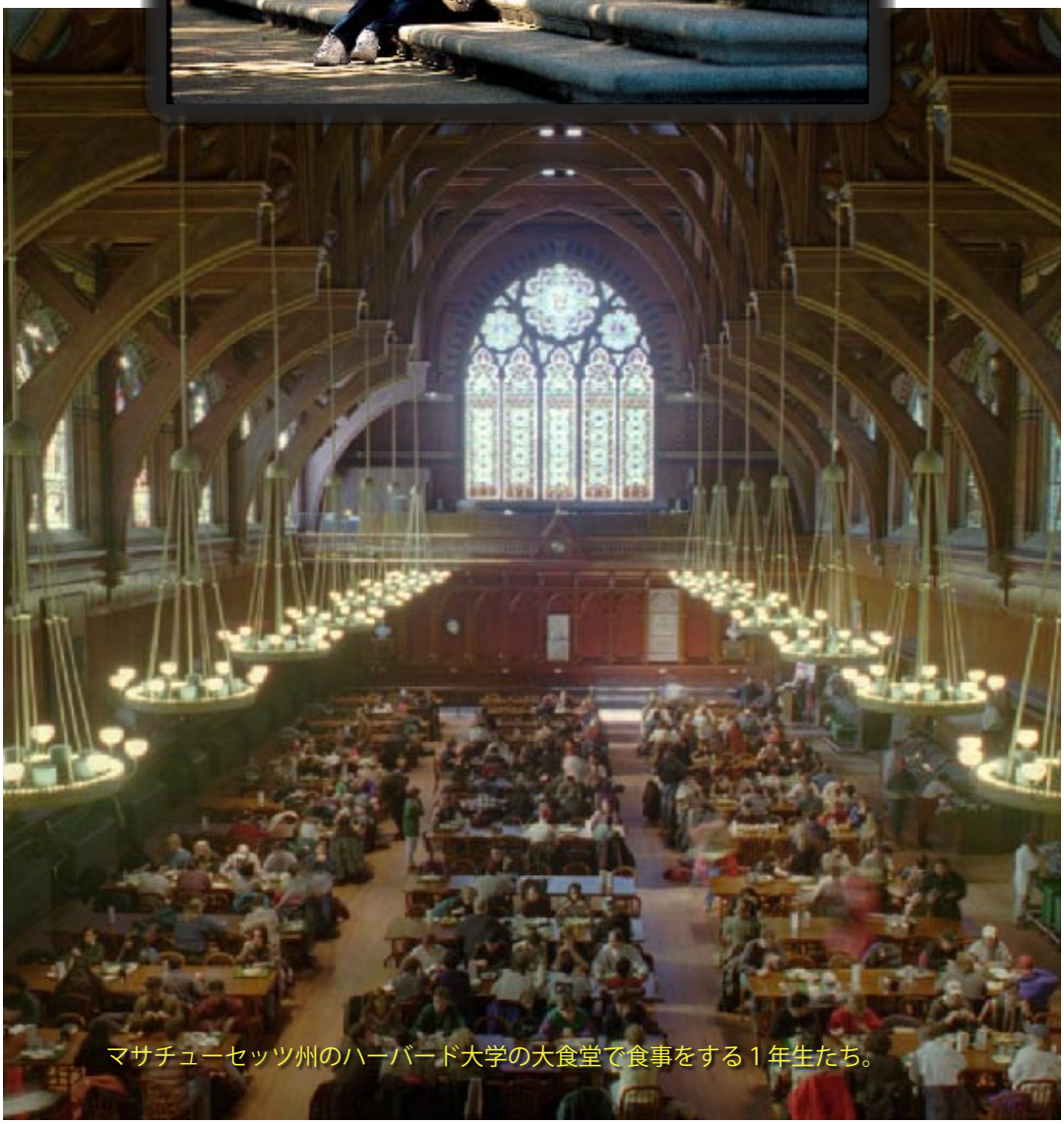
学校、大学、大使館、国際機関、企業、各種協会、地域団体など、国際教育・交流活動に関心のある個人や機関の参加を奨励している。（http://iew.state.gov/）

COLLEGE LIFE

カレッジ・ライフ

快適な勉強場所があれば、研究課題もはかどる。ジョージア州の穏やかな気候を満喫するスペルマン大学の学生たち。

写真提供　Spelman College



マサチューセッツ州のハーバード大学の大食堂で食事をする１年生たち。

Jon Chase, AP/WWP

College Life
カレッジ・ライフ

Stephen Morton, AP/WWP

サバンナ・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン（ジョージア州）が毎年開催するサイドウォーク・アート・フェスティバルの「リビングアート・プロジェクト」に参加する学生（左）。

Mary Ann Chastain, AP/WWP

サウスカロライナ州のコンバース大学で、オペラ「ラ・ボエーム」の舞台に立つ、スリランカのタランガとエランガ・グーネティレケ姉妹（右）。このオペラはインドネシアの津波災害が発生して１カ月もたたないうちに上演されたが、その時点で、２人はすでに義援金8000ドルを集めており、この公演によってさらに多くの義援金が集まることを期待していた。

Sara D. Davis, AP/WWP

女子サッカー選手権で競争心をむき出しに戦うノートルダム大学とカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)の選手たち(左)。

College Life

カレッジ・ライフ

Linda A. Cicero/Stanford News Service

カリフォルニア州のスタンフォード大学では、1970年代に、「バレー・フォルクロリコ・デ・スタンフォード」（左）や、学生の主催で毎年行われるスタンフォード・パウワウ（下）のような文化行事が、学内のさまざまな人々の相互理解を促進するために導入された。バレー・フォルクロリコは、メキシコ文化の普及を目的とする。スタンフォード・アメリカン・インディアン協会が企画するパウワウには、全米から３万人以上が参加する。

Linda A. Cicero/Stanford News Service

写真提供　Davidson College

ノースカロライナ州のデービッドソン大学で中国語の習字を練習する学生。

大学フットボールで最も権威のある大会のひとつ「ローズ・ボウル」で勝利を収めたばかりのテキサス大学の選手たち。

Paul Sakuma, AP/WWP

COLLEGE LIFE

カレッジ・ライフ

Ed Andrieski, AP/WWP

コロラド州にある空軍士官学校で卒業を祝う生徒たち。

Daymon J. Hartley, AP/WWP

ミシガン州議会上院で、盛んに議論された、優秀学生のための「メリット・アワード」奨学金制度の改革を提案する、セントラル・ミシガン大学政治学部の学生たち（上）。

Nati Harnik, AP/WWPWWP

ネブラスカ州オマハ市にあるメトロポリタン・コミュニティーカレッジのラウンジで勉強する学生たち。

College Life

カレッジ・ライフ

Gene Blythe, AP/WWP

バスケットボール大会を盛り上げるジョージア大学のバンド。

Matt Houston, AP/WWP

全米ソーラー・デカスロン大会でのために自分のチームが設計した住宅の一部を作るメリーランド大学の学生（上）。大会では、同大学に近いワシントンＤＣのナショナル・モールに集まった見物の人々に新しい技術が披露された。

Fred Faulk, AP/WWP

2001年９月11日の同時多発テロの犠牲者の追悼式に集まったミシシッピ州立大学の学生たち。

クローズアップ

ペンシルベニア大学国際関係プログラム

マイケル・ジェイ・フリードマン

Frank Plantan

ペンシルベニア大学国際関係プログラムの学生、（左から）リビア・ルラース・ハイゲンス、モハマド・アルアリ、マシュー・フリッシュ。

米国の一流大学のひとつであるペンシルベニア大学の国際関係プログラムは、国際問題に関心のある学生に、それぞれの目標に沿った研究に従事する機会を与えるとともに、国内外の実業界、政府、学界その他の分野でキャリアを積むための教育を行う、学際的なプログラムである。マイケル・ジェイ・フリードマンは、米国国務省国際情報プログラム局専属ライターである。

米国の大学の学部生は、通常２年目の終わりまでに「専攻」分野を決める。経済、政治、文化の国際化が増すに従い、フィラデルフィア市にあるペンシルベニア大学では、「国際関係論」が最も人気のある専攻科目のひとつとなっている。国際関係論は、学際的なプログラムであり、学生は多くの異なる分野の科目を履修し、担当指導教官の下で30～40ページの卒業論文を執筆しなければならない。

国際関係論を専攻するための基準は厳しい。希望者は、成績評価点が4.0点中2.8点以上で、政治学、西洋文明、ミクロ経済学、およびマクロ経済学の必修科目を履修していなければならない。国際関係論専攻を認められた学生は、国際関係理論、国際経済、外交史、および国際政治学を中心とする必修科目を履修する。また、人文科学部およびウォートン・スクール・オブ・ビジネスの科目の中から選択科目として認められている科目を選ぶ。これによって、学生は、東アジア研究から人類学、そして国際金融まで、さまざまなテーマに合わせた研究を行うことができる。また、このように幅広い選択肢があるため、国際関係論専攻の学生は、「ダブル・メジャー」といって、国際関係論に加え、歴史、政治学、経済学などの分野で、同時に２つの学位を取得することも多い。

国際関係論専攻の学生はそれぞれ、各自選んだ国際関係関連のテーマで卒業論文を書く。最近卒論に取り上げられたテーマを見ると、「２国間関係における歴史的記憶の役割 - 日本と中国、および日本と韓国の関係」から「多国籍企業が国際取引法にもたらす課題」まで、多岐にわたっている。

カナダのトロント市出身の４年生マシュー・フリッシュが国際関係論を専攻した理由は、幅広い科目を探究して「知識基盤を多様化する」ことができるからである。フリッシュは、同大学のアネンバーグ・スクール・オブ・コミュニケーションで取った選択科目の講座を高く評価している。「コミュニケーションと大統領職」というその講座では、自分の選んだ大統領図書館を訪問するための研究補助金を各学生に与えた。フリッシュは、ボストン市にあるジョン・Ｆ・ケネディ図書館・博物館を訪れ、ケネディの冷戦政策と公民権政策の相互作用に関するゼミ・レポートのための調査を行った。そのレポートは後に、学生が発行するペン・ヒストリー・レビュー誌で発表された。

米国とクウェートの二重国籍を持ち、国際関係論と経済学をダブル・メジャーで専攻する３年生のモハマド・アルアリは、国際関係論を学ぶことは、自分が持つ２つの文化と環境の「ギャップを埋める」ことに役立つ、と言う。米国とベルギーの二重国籍を持つ学生で、国際関係論とフランス語のダブル・メジャーのリビア・ルラース・ハイゲンスは、家族が政治亡命者として米国に来た。国際難民法に関わる仕事を目指す彼女にとっては、国際関係論が最も適した専攻であるという。

国際関係論専攻の学生は、さまざまな学術、社会、および職業訓練活動に参加することができる。その多くは、学生の運営する国際関係論専攻学部生協会(IRUSA)が後援している。IRUSAの現会長ルラース・ハイゲンスによると、毎年IRUSAの援助を受けて学生がニューヨーク市とワシントンＤＣを訪れ、法律および国際関係論の有名大学院の教授陣と交流している。

ペンシルベニア大学の国際関係論専攻の卒業生は、多くの分野で活躍している。国際関係論プログラムのフランク・プランタン共同ディレクターは、「国際問題に関する知識を持つとともに、研究、執筆、その他世界の変化を評価するための技能を備えた人々に対する需要は大きい。官民学の各界で、また国内外のさまざまな分野で、こうした人たちが必要とされている」と言う。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

米国の大学認定制度について

「大学認定制度とは、大学および高等教育プログラムの品質保証と質的向上を目的に、各教育機関およびプログラムを厳しく調査する、外部審査プロセスである。米国の大学認定制度は、100年以上の歴史を持ち、もともとは公衆の衛生と安全を守り、公共の利益に資するために作られたものである。

米国では、大学認定制度は、この目的のために設置された民間の非営利組織によって実施されている。外部の組織による高等教育の評価には、政府は関わっていない。他国では、大学の認定および品質保証活動は、通常、政府が実施している。（中略）

認定機関は、米国50州の大学のほか、多くの外国の大学を審査する。また、法律、医学、ビジネス、看護学、社会福祉、薬学、芸術、ジャーナリズムなど、幅広い職業や専門分野にわたる何千ものプログラムも審査する。」

上記の文書によると、認定機関には、地域、全国、および特定の専門職種担当の３種類がある。認定制度の目的は、品質の保証、連邦政府の補助金取得に係る資格審査、学校間の編入を容易にすること、そして教育機関が授与する学位や免許に対する雇用者の信頼を高めることである。

[HTTP://WWW.CHEA.ORG/PDF/OVERVIEW_US_ACCRED_8-03.PDF]

高等教育基準認定協議会会長

ジュディス・Ｓ・イートン

留学生が見つけた新しい故郷とグローバルな目的

リチャード・ホールデン

Tom Strickland

アフガニスタンのジャワド・ジョヤとケニアのイベット・イサーが、インディアナ州リッチモンド市のアールハム大学に留学したのは、クエーカー教徒の教義に基づく奉仕と行動主義を重視する同大学の方針に魅力を感じたからである。

インディアナ州リッチモンド市のアールハム大学は、クエーカー（キリスト友会）的秩序の中で最も質の高い教育を提供することを目指す、独立系教養大学（リベラルアーツ・カレッジ）である。学習と真実を尊重することを重視し、学生たちに、在学中も卒業後も、行動的で探求心旺盛な学習者となるとともに、知的な探求に加えて、国際教育、紛争の平和的解決、個人の平等、そして個人の行動に関する高い道徳基準を重視する生活を送ることを奨励している。リチャード・ホールデンは、アールハム大学元広報担当ディレクターである。

アールハム大学の留学生は、１人残らず将来へのビジョンを持っていると言ってよい。この小さな教養大学には、激動する世界に、公正かつ平和的な解決策をもたらすことを目指す学生たちが集まってくる。そして、その大半は、卒業を待たずに、世界の問題に取り組んでいる。そうした強い衝動を強く感じている留学生に、アフガニスタンのジャワド・セペリ・ジョヤと、ケニアのイベット・イサーがいる。２人とも、すでに、学業で得た専門知識を、世界各地の社会・政治問題の解決に役立てる多くの方法を見つけている。

留学生は、母国で行われている不正を見た個人的な体験から、活動に打ち込むことが多い。ジャワドは、克服しがたいと思われる状況も、希望と勤勉によって乗り越えることができるということを示す、生きた手本である。無学で貧しいシーア派イスラム教徒の家庭に生まれ、小児まひのため車いす生活となったジャワドは、1990年代後半、混乱するカブール市で暮らしており、将来の見通しは暗かった。タリバン政権は、教育全般を抑制しようとしたが、特に女子や身体障害者の教育を妨げた。しかし、赤十字の施設で働いていたイタリア人医師が、ジャワドの才能を見出し、ひそかに彼に家庭教師を付けた。ジャワドは、すぐに外国語やコンピューター技術を習得した。そして、13歳になるころには、赤十字の施設でプログラマーとして働き、充実した将来の生活を思い描くようになっていた。

このイタリア人医師、そして2002年にタリバン政権崩壊後に出会ったイタリア人ジャーナリストとの間で友情を育んだことで、ジャワドは戦争で荒廃したアフガニスタンを逃れ、イタリアのトリエステ市にある学校に入学することになった。そこで国際バカロレア（大学入学）資格を目指しながら、米国とカナダの大学に

願書を提出した結果、アールハム大学を含むレベルが高いいくつかの大学に、全額給付の奨学金付きで入学を認められた。

「ここに来ることができて、こんなにうれしいことはありません。大きな大学に比べると、ここでは、自分の信念に沿った研究がしやすいと思います」と、ジャワドは満面の笑みをたたえて言う。アールハム大学で２年目を迎えているジャワドは、科学を中心に、人文・社会科学系の講座も取っている。「自分の経験から、自然主義的な観点から平和を研究することに興味を持つようになりました。生物学では、同種間の競争という問題があります。人間もそうした種のひとつですから、私は、この問題を別の角度から検証しています。つまり、われわれが人間らしい方法で競争をするにはどうすればよいかを探求しています」と、ジャワドは説明する。彼は、大学院でもこのテーマで研究を続け、いずれは大学、財団、あるいはシンクタンクに勤務したいと考えている。

キャンパス内の課外活動や親睦活動にも常に積極的なジャワドは、模擬国連、平和と国際研究クラブ、アムネスティ・インターナショナル、およびアジア人学生連合に参加している。また、奨学金を補うために、アールハム大学の「平和と国際研究(PAGS)プログラム」の有給インターンとなり、PAGSカリキュラムの効果を高める方法について研究をしている。

昨夏、彼は、全米の大学から選ばれた40人の代表の１人として、カリフォルニア州スタンフォード市のスタンフォード大学で開催された日米会議に出席し、その後、カリフォルニア州フレモント市に本部を置く北米アフガニスタン人専門職者協会で仕事をした。「キャンパス、地域社会、そして世界各地における和平と正義を探求する活動に貢献した」活動により、ジャワドは今年、全米平和正義協会の最高学生賞を受賞した。また、インディアナ州ゴーシェン市のゴーシェン大学で行われたプラウシェアズ学生平和会議でも、同様の賞を授与された。

アフガニスタン、イタリア、そして米国での経験を持つ20歳のジャワドは、自らを「地球市民」と呼び、「今私に必要なのは、グローバルビザだけです」と言う。

イベット・イサーは、アールハム大学で国際関係論を専攻する３年生である。彼女は、この大学のクエーカーの伝統と、「非暴力、質素、社会正義」という理念に共鳴した。インド人の両親を持つイベットは、ケニアのナイロビ市で生まれ育った。「私には祖国が２つあると思っていますが、どちらかというとインドの方に親近感を感じます」とイベットは言う。彼女は、「初めて（アールハムに）来たときは、中西部の小さな町の生活はつらいだろうと思いました」と認めたうえで「でも、実際には素晴らしいところでした。この大学のコミュニティーはすばらしく、周りも責任感の強い人たちばかりです」と付け加えた。

イベットは、アールハム大学で、「知識に基づく民主主義を支持するアメリカ人（ＡＩＤ）」という組織の支部を作った。ＡＩＤは、世界各地の大学生がビデオ会議で国際的な問題を直接話し合い、その解決策についてコンセンサスを取る場を提供している。今日、学生が運営するＡＩＤ支部は、米国内、外国を合わせて70カ所におよぶ。「ＡＩＤの合宿に参加し、外国について米国の一般市民にもっとうまく伝えるにはどうすればいいか、そして同時に外国の人たちが平均的なアメリカ人と触れ合う機会を増やすにはどうすればいいか、ということについて素晴らしいアイデアを持つ人たちに出会ったことがきっかけでした」

イベットは今年、４つの会議を企画し、米国の学生たちが、パキスタン、オーストラリア、フィリピン、ホンデュラス、スリランカなど多くの外国の学生と接触する機会を作っている。こうした会議で、学生たちは、「自然災害へのグローバルな対応」、「米国は海外で民主主義を追求すべきか」といったテーマで議論した。

ジャワドと同様に、イベットも模擬国連に深く関わっており、昨年はシカゴ市で行われた模擬国連の地域会議に、レバノン代表として出席した。「これは、他人の立場に立って、他国の国益を代表するのですが、それだけではなく、外国の人たちと協力して作業を進め、世界の利益のために譲歩することを学ぶためのものです」とイベットは言う。

このほかにもイベットは、アールハム大学合唱団の一員として、音楽も楽しんでいる。昨春は、同大学の「ウィーンでの合唱体験学期」に参加した。「ヨーロッパの中心へ行って、荘厳な大聖堂で歌うのは、信じられないほどの素晴らしい体験でした。決して忘れることのない体験です」と、イベットは語る。

米国の大学で学んだ最も重要な教訓は何かという質問に対して、彼女は、考え深げに天井を見つめながら、このように答えた。「それは、地域社会が、個人にとって最も重要なもののひとつであるということです。他の人たちとのつながりや愛がなければ、人は不幸な状況にある孤島にすぎません。人はお互いに助け合い、隣人の世話をすべきである、ということを私は学びました。そんなことは前から分かっていたのかもしれませんが、本当に学んだのは米国に来てからです。」

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

社会奉仕

ロビン・L・イエーガー

Rogelio Solis, AP/WWP

ミシシッピ州ジャクソン市で建設中の非営利団体「ハビタット・フォー・ヒューマニティ」の住宅の完成を急ぐ南ミシシッピ大学とイリノイ大学の学生たち

本稿では、米国国務省国際情報プログラム局専属ライターのロビン・イエーガーが、米国の大学がどのように学生に地域社会への奉仕を奨励しているかを説明する。

米国には、ボランティア活動の強い伝統がある。若者は、小さいときから、地域社会に貢献する方法を見つけるように言われる。全米各地の大学では、学生がボランティアの奉仕活動に参加する機会を提供している。ボランティア活動によって大学の単位を取得できる場合もあるが、誰かを助けること、そして若い自分も役に立てると自覚することによる満足感が、唯一のご褒美である場合が多い。この概念を具体化しているのが「キャンパス・コンパクト」である。そのウェブサイト（http://www.compact.org）によると、この組織は、「およそ500万人の学生を代表する950校以上の大学の学長で構成される全国的な連合で、高等教育における社会奉仕、市民参加、およびサービスラーニング（奉仕学習）の促進を追求している」

ミシシッピ州ハティスバーグ市にある南ミシシッピ大学の社会奉仕学習室(OCSL)は、1992年の設置以来、同大学のコミュニティーに属するすべての人々にとって、社会奉仕とサービスラーニングのボランティア資料センターおよびサービス拠点として機能している。地域社会およびキャンパスでの奉仕に費やされる時間は、年間２万時間を超える。このプログラムは、優秀な学業成績、地域社会のための奉仕、そして学生自身の成功を基本としており、地域、全米および世界的なレベルで学生が奉仕活動に参加することを奨励している。南ミシシッピ大学は、現在東ミシガン大学と提携して大学でのサービスラーニングのモデルを改定しようとしている高等教育機関６校のうちの１校である。また、ミシシッピ州地域社会・市民参加センターのホスト機関でもある（http://www.usm.edu/ocsl）。

イリノイ州アバナシャンペーン校は、サービスラーニングについて、以下のように説明している。

一般教育の大きな目的のひとつは、社会の一員として責任を負えるよう、学生たちを教育することである。そのための手段のひとつとして、本学では、学生による社会参加を授業での体験と関連付けている。一般教育は、学生が知性と社会性の両面で、楽しみながらも責任ある態度を身に付けられるよう、これを支援するものである。さまざまな発想をあれこれ吟味し、異なる世界を想

Ted S. Warren, AP/WWP

ワシントン州シアトル市にあるシアトル大学のキャンパスで主催されたホームレスのためのテント村で、聴覚障害を持つホームレスにアメリカ手話を教える同大学の学生。

像し、無意識の思考習慣に抵抗することを楽しみ、基本的な世俗的つながりという責任を負うのである。

公共活動への参加を通じて、本学の学生たちを社会と関係付けることが極めて重要なのは、そのためである。一例を挙げると、建築デザインスタジオの学生たちは、２学期間にわたって、非営利団体ハビタット・フォー・ヒューマニティのために、低コストでエネルギー効率の高い住宅を設計する、という課題に挑戦した。低所得層の家庭でも買えるような住宅を作る一方で、高度な技術を使って省エネを実現するという市民としての責任に根差した、一連の複雑な価値観や選択肢が原動力となって、このユニークな住宅を建設するにいたった。（http://www.union.uiuc.edu/ovp/sle/）

ニューイングランド地方では、ダートマス大学、バーモント大学、セントマイケルズ大学、ノーウィッチ大学、シャンプレーン大学およびキャッスルトン州立大学が、さまざまな地方政府機関および非政府機関と提携して、「レクリエーション・教育・冒険・指導教育による指導(DREAM)」という制度を作り、低所得地域の子どもたちに長期的な助言者を提供している。DREAMは、1999年にダートマス大学で始まり、現在は州内各地に施設を持ち、多くの地域社会の子どもたちを支援している。この制度は、青少年育成と地域開発の原則、長期的な助言者との週に１度の定期会合、そして旅行、スポーツ、サマーキャンプ、スポーツ界のヒーローや地域の指導者との交流などのレクリエーションを取り入れている。提携先には、住宅局、ガールスカウト、ベン・アンド・ジェリーズ･アイスクリーム社などがある。（http://www.dreamprogram.org/）

ワシントン州シアトル市のシアトル大学は、2005年11月、ホームレス問題に関する全国会議を主催した。シアトル大学が、この年次会議の第５回会合の主催者となるよう依頼されたのは、同大学が2005年２月に「テントシティ３」という、ホームレスの男女100人のための移動テント村を１カ月にわたり主催した実績による。シアトル大学は、このような形でホームレス社会を受け入れた初めての大学となった。シアトルで行われた全国会議は、シアトル大学の学生たち、および高等教育における市民としての責任を振興するために結成された、州の大学学長連合であるワシントン州キャンパス･コンパクトのメンバーが準備した。この会議について詳しくは、http://www.studentsagainsthunger.orgを参照。

全国的に知られるサービスラーニング課程のひとつに、サウス

サウスカロライナ州で子どもたちに演技の指導をするウォフォード大学の学生。　写真提供　Wofford College

カロライナ州グリーンビル市のファーマン大学のプログラムがある。同大学のウェブサイトが提供する入学希望者向けの情報によると、

「本学では、宗教、教育、芸術、哲学、社会学、政治学などの多くの授業で、カリキュラムにサービスラーニングを取り入れている。恵まれない環境にいる子どもたちに読むことを教えたり、地元の非営利組織のためにマーケティング・イベントを企画したり、あるいは起業家の事業計画作成を助けるなど、学生は多くの授業のなかで、地域社会での活動に従事することができる」

サービスラーニングの機会は、クラスの外にも豊富にある。ファーマン大学では、毎年800人の学生が、学生が運営するマックス・アンド・トルード・ヘラー大学生教育奉仕部隊にボランティアとして参加し、救世軍、マイヤー特殊教育児童センター、ヒスパニック・アフェアーズ、ガールスカウトなど、グリーンビル市の45の機関を支援している（http://www.furman.edu/main/community.htm）。

グリーンビルに近いサウスカロライナ州スパータンバーグ市のウォフォード大学にも、サービスラーニング・プログラムがある。この小さな教養大学では、学生が直接、または地元の機関・組織を通じて、ボランティア活動をしている。個人のボランティアとして活動する学生もいれば、大学のクラブや友愛会など、キャンパス・グループの仲間とともに参加する学生もいる。ウォフォードの学生たちは、スープキッチン（貧しい人々のための食事を作り、提供する場所）やホームレス収容施設で奉仕活動をしている。また、地元の学校で教えたり、無料診療所で働いたりする。貧しい子どもたちにクリスマス・プレゼントを配ったり、キャンパスや地域社会の美化運動に参加したりする学生もいる。（http://www.wofford.edu/serviceLearning/default.asp）

あらゆる種類の大学が、サービスラーニング・プログラムを提供している。全米コミュニティーカレッジ協会によると、米国のコミュニティーカレッジの半数以上が、ある程度のサービスラーニングを教科課程に取り入れている。同協会は、サービスラーニングに関する刊行物を多数発行しているが、特に、*Sustaining Service Learning: The Role of Chief Academic Officers*（全８ページ）および*A Practical Guide for Integrating Civic Responsibility Into the Curriculum*（全86ページ）の２冊が興味深い。いずれもhttp://www.aacc.nche.edu/Content/NavigationMenu/ResourceCenter/Projects_Partnerships/Current/HorizonsServiceLearningProject/Publications/Publications.htmで閲覧可能である。

ニューメキシコ州のアルバカーキ職業技術大学(ATVI)は、優れたサービスラーニングを実施しているコミュニティーカレッジの好例である。同大学は、全米・地域サービス公社の補助金を受けているほか、1999年全国ベルウェザー賞および全国コミュニティーカレッジ地域参加センターの2004年サービスラーニング・市民参加賞を受賞している。同大学の学生は、50を超える地元機関で、子どもたちのための各種プログラム、医療サービス、社会奉仕・法律サービス、森林業務、スペシャルオリンピック、議員事務所２カ所、動物愛護協会などから選んで奉仕活動を行うことができる。（http://planet.tvi.cc.nm.us/experientiallearning/）

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

7つのスナップショット:

教育機会の実例

米国の大使館・領事館は、相互理解を深めるための教育・文化プログラムの企画と運営など業務のさまざまな側面を支援してもらうために、外国籍の職員を雇用している。2005年4月、米国国務省は、研修のために、外国人職員18人を米国に招いた。彼らは、研修の一環として、ノースカロライナ州シャーロット市内および周辺の大学数校を訪問し、留学生のキャンパス体験を観察した。本稿では、この研修グループの報告を概説し、米国におけるさまざまな教育機会を紹介する。

ノースカロライナ州シャーロット市が選ばれたのは、同市が米国南東部における、金融、マスコミ、ビジネス、文化、交通の中心のひとつであるとともに、高く評価されている教育機関が多数存在するためである。18人の参加者はいくつかのチームに分かれ、それぞれがひとつの大学キャンパスを訪れて、学生と交流し、授業を見学し、学生が利用できる設備や直面する課題について話し合い、留学生の体験を肌で感じることができた。訪問先の大学は、いずれも留学生の勧誘に極めて熱心であり、最新の使いやすいウェブサイトを維持して、留学生に情報を提供している。外国人学生を対象とした情報提供の典型的な例として、デービッドソン大学のウェブサイトを以下に抜粋する。

国際意識と、グローバルな問題に関心を持つことは、デービッドソン大学における教育の重要な要素である。国際的な環境で暮らし、学んできた学生として、皆さんは本校のコミュニティーに属する人々と共有できるものをたくさん持っている。私たちは、願書提出手続きを通じて、皆さんと、皆さんの体験について、より多くのことを知りたいと願っている。

7つの大学

写真提供　Belmont Abbey College

ベルモント・アビー大学は、学生数1000人の小規模な教養大学で、「家族的」な環境と、知性・肉体・精神という三拍子そろった人間形成を追求することで知られている。ノースカロライナ州シャーロット市から西へ数分のベルモント市にあり、ベネディクト修道院であるベルモント・アビーに付属している。（http://www.belmontabbeycollege.edu/）

セントラル・ピードモント・コミュニティーカレッジ(CPCC)は、ノースカロライナ州最大のコミュニティーカレッジである。7万人以上の学生が数カ所のキャンパスに分かれ、100以上の課程で学んでいる。ジョージ・W・ブッシュ大統領は2005年４月５日、労働力開発計画を発表する場として、CPCCを選んだ。100カ国を優に超える国々からの留学生がCPCCで学んでいる。（http://www.cpcc.edu）

写真提供　Central Piedmont Community College

CPCCのコンピューターの授業で学生を指導する教授。

写真提供　Davidson College

デービッドソン大学では、毎月ひとつの国を取り上げて、食事の際にその国の料理、音楽、装飾を取り入れるプログラムを始めた。写真は、パンを焼くボランティアの学生たち。

デービッドソン大学は、シャーロットから北へ30分ほどのところに位置するデービッドソン市（人口8000人）にある。独立系の教養大学で、学生数は1600人である。1837年に長老派の信徒によって創設された同大学は、23人のローズ奨学生を輩出している。デービッドソン大学卒業生で国務長官を務めたディーン・ラスクを記念して、20年前に設立されたディーン・ラスク国際研究課程をはじめ、優れた教科課程が多数ある。同大学は、男子校として創設されたが、今日では学生の男女比率は半々である。（http://www.davidson.edu）

ジョンソン・アンド・ウェールズ大学は「米国を代表する職業大学」を自任している。４州にキャンパスを持ち、そのうちのひとつ、シャーロット・キャンパスは2004年に開設された。同大学は、経営学、接客業（ホテル・レストラン）、および調理の各分野で、準学士号（２年制）と学士号（４年制）を授与している。同大学のウェブサイトは、17カ国語で提供されている。（http://www.jwu.edu/charlotte）

Victoria Arocho, AP/WWP

「全米パン・サミット」で、パンの飾り付けをするジョンソン・アンド・ウェールズ大学の学生。

.

写真提供　Johnson C. Smith University

ジョンソン・C・スミス大学のサービスラーニング・プログラムでは、学生が個人指導を必要とする地元の子どもたちとペアを組み、土曜日のサタデー・アカデミーで勉強を教える。このプログラムによって、算数や読解テストの点が低かった多くの子どもたちが、州の平均点を上回る成績を収めるようになっている。

ジョンソン・C・スミス大学は、伝統的黒人大学である。シャーロット市の中心部からわずか1マイルの広大な全寮制のキャンパスで、1400人の学生が、打ち解けた雰囲気の中、熱心で親切な教職員の指導により刺激を受け、成長している。同大学では、卒業の条件として、社会奉仕を義務付けている。また、9カ国への海外留学制度と、90社以上の企業と提携したインターンシップなどの実践教育体験を提供している。（http://www.jcsu.edu/）

写真提供　Queens University of Charlotte

クイーンズ大学の卒業式。

シャーロット・クイーンズ大学は、女子神学校として設立された。今日では、長老派教会に付属する、修士課程を持つこの私立総合大学に在籍する学部生のおよそ30％が男子である。同大学は、シャーロットの美しい住宅地域にあり、一般教養のコアプログラムと、24の専攻科目から選択できる学部課程プログラムがある。学生数は約2200人で、生徒と教授の比率は13対1である。（http://www.queens.edu/）

ノースカロライナ大学シャーロット校(UNCC)には1万9500人以上が在籍しており、学士号、修士号、博士号を授与している。シャーロット市の中心部から約10マイル離れた近代的なキャンパスは、重要な地域ビジネスと研究の中心となっている。UNCCには、全米各地および80カ国から、学生が集まっている。（http://www.uncc.edu/）

キャンパスの名物となっている「たたき上げの人」の像をバックに記念撮影をするUNCCの学生たち。

Wade Bruton/UNC Charlotte

調査結果

入学許可と願書の提出。 入学許可の基準は大学によって異なる。デービッドソン大学とクイーンズ大学は、いずれも入学の条件が非常に厳しいと自任している。ベルモント・アビー大学は、学力と精神的な発達を重視するが、ジョンソン・C・スミス大学は、成績だけでなく、学生の人格や性格にも注目する。セントラル・ピードモント・コミュニティーカレッジでは、ほぼ誰でも自分に合った教科課程を見つけることができるが、誰もがすべての課程に合うわけではない。最も大きい２つの大学ノースカロライナ大学シャーロット校とセントラル・ピードモントは、いずれも学生が利用できる設備が充実しているが、大学の規模が大きいため、多少威圧感を感じさせる。自分に合った大学を探すことが、願書提出の手続きにおいても、入学後の学生の成績や満足感においても、極めて重要であることは間違いない。どの大学にも、入学許可や奨学金に関する情報を掲載したウェブサイトがあり、ほとんどの場合、留学生向けの詳しい情報も提供している。

居住施設、食事、各種設備、医療、保安。 セントラル・ピードモント以外の各大学は、キャンパスに学生寮があり、入居申請に関する情報を提供している。食事や住居の形態は、大学によって異なるが、通常、特に２年目以降はさまざまな選択肢がある。どの大学にも図書館があり、学生の使えるコンピューターがある。また、キャンパスの安全に関する情報も提供している。どの大学でも、学生は健康保険に加入していなければならないが、大学の提供する医療サービスがある。大学生活に適応するためのサポートが必要な学生のためには、カウンセリングも行われている。費用や方針は、大学によって異なる。学期の日程も、大学によって、また年度によって異なるため、入学予定者は、各大学のウェブサイトなどで、授業の日程、書類の提出期限、休日などを調べる必要がある。

学業支援。 英語や文章の書き方の個人指導を行っている大学もある。また、通常、図書館では、資料の使い方やリサーチの方法を教えてくれる。どの大学でも、就職フェアへの参加など、卒業後の就職支援を行っている。

留学生のためのサービスや組織。 留学生や、国際関係に関心のあるアメリカ人・留学生の交流のためにイベントを企画する事務局や、協会、クラブなどがある。民族的あるいは地理的な共通項を持つ学生たちの組織が多数ある大学もある。留学生を、地元の学生や家族に紹介し、特に休暇を共に過ごすようにする制度を設けているところもある。シャーロットの非営利組織インターナショナル・ハウスのように、複数の大学の留学生が所属し、市内の他の留学生と交流するための組織もある。

宗教。 国務省の職員からは、宗教に関する質問も出たが、留学生も、留学生のアドバイザーも、学生は、信仰している宗教にかかわらず、すべてのキャンパスで歓迎され、尊重されることを強調した。これは、公立大学でも私立大学でも、また宗教系大学でも同様である。

結論

参加した国務省職員たちは、短期間の訪問であったが、それまでに読んだり聞いたりしていたことを実地に観察し、理解を深めることができたと感じた。彼らが学んだ最も重要な点は、米国で学習するにはさまざまな、すばらしい方法がある、ということであった。

寄稿者（写真下）-- Mohamed Ahmed Abdalla Ahmed（カタール、ドーハ）、 Vivian Abdallah（エルサレム）、Paraskevi Vivien Allimonos（オーストラリア、メルボルン）、Nada A. Al-Soze（イラク、バグダッド）、Majka Brzostek（ポーランド、クラクフ）、Borie Bendezu-Velez（ペルー、リマ）、Josita Ekouevi-Amavi（トーゴ、ロメ）、Alejandra Escobosa（メキシコ、エルモシロ）、Usawadee Katpichai（タイ、バンコク）、Pamela Kuwali（マラウィ、リロングウェ）、Ratna Mukherjee（インド、チェンナイ）、Maria Paola Pierini（イタリア、ローマ）、Dana Polcikova（スロバキア、ブラチスラバ）、Karin Rosnizek（ドイツ、ミュンヘン）、Luisa Maria Viau（グアテマラ、グアテマラ市）、Beatrice GP Vilain（ハイチ、ポルトープランス）、Cornelia Vlaicu（ルーマニア、ブカレスト）、Zhou Hong（中国、広州）

Robert Kaiser/U.S. Department of State

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

制度の説明

大学の専攻科目の選択

リンダ・トバシュ

Stew Milne, AP/WWP

大学の授業には、少人数のものもあれば、大人数のものもあり、形式ばったものもあれば、カジュアルな雰囲気で行われるものもある。この写真は、ロードアイランド州のブラウン大学での講義の様子。

国際教育研究所大学進学サービス担当ディレクターのリンダ・トバシュが、大学の「専攻」と「副専攻」という概念を説明し、専攻を決めようとしている学生のためにアドバイスを提供する。

「皆と同じように、大学の専攻を決めた年のことはよく覚えている。なんと、３回も決断を下したのだ」
ペンシルベニア大学美術史教授　デービッド・ブラウンリー博士
（http://www.college.upenn.edu/curriculum/major_choosing.html）

何千もの大学、何百もの専攻科目の中から、自分に合ったものを選ぶには、どこから手を付ければよいのか。まず、どの大学に行くかを決める学生もいる。大規模な総合大学か、小さな教養大学か、あるいは、工学、技術、コンピューター科学などの専門大学か。都会の大学か田舎の大学か、海の近くか山の中か、家族のいる地元か遠くの町か、奨学金制度のある大学にするか、サッカーチームの一員としてプレーしたり、キャンパス内のラジオまたはテレビ局、新聞部、演劇や映画制作部などで働くなど、特定の課外活動のある大学にするか、といった基準で選ぶのである。しかし、多くの学生は、まず自分の学びたい分野を決め、それに最も適した大学を選ぶ。

外国の教育制度では、中等教育で何を学んだか、あるいは大学入学試験の点数によって大学の専攻が決まる例もあるが、米国の大学の学部志願者は、通常、さまざまな学校や専攻科目の中から選ぶことができる。もちろん、入学条件の厳しい大学では、競争率が非常に高く、一握りの極めて優秀な学生だけが入学できる。入学がそれほど難しくない大学でも、専攻科目によっては（例えば看護学部、工学部など）入学審査の条件が厳しく、競争率が高い場合もある。しかし、一般には、学生には幅広い選択肢がある。

Pat Little, AP/WWP

巨大なエンジンを動かすには微調整が必要だ。ペンシルベニア工科大学で学ぶこの学生は、ベンジャミン・フランクリンの遺志による寄付金で設立された奨学金を受けている。

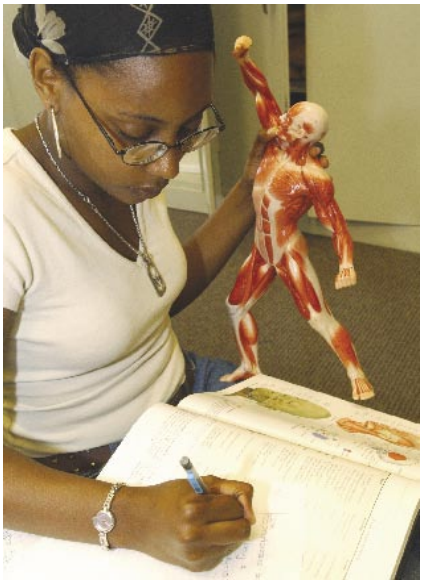
大学の専攻とは何か

スタンフォード大学のウェブサイトによると「専攻とは、学生の選択により学部の課程で専門的に研究する分野である。この選択によって、多大な時間とエネルギーを費やす学問分野が決まる。専攻科目の必要単位と、大学の定めた必要単位を取得すると、学士号を授与される。専攻科目によって、知的な技能を磨き、ひとつの学科を基礎から理解し、高度な研究まで行えるようになることで自分の能力を示すことができる。何を専攻するかは、自分で下さなければならない重要な決断である」（http://www.stanford.edu/~susanz/Majors.html）

学生が専攻を決めるということは、大学との間で、所定の履修課程を完了するという契約を結ぶことである。この課程は、一般教養の必要単位（大学の必要単位）と専攻科目の必要単位から成る。すなわち、大学のカリキュラムは、専門分野の講座だけではなく、時には講義の50～60％を、一般教養科目、および学生が専攻科目内外の各種科目から選ぶ選択科目が占めることもある。一般教養科目と専攻科目の比率は、大学により、また専攻分野によって異なるが、どの大学でも一定の一般教養科目履修が義務付けられている。米国の学士課程の教育は、教養大学の伝統に根ざしており、一般教養が非常に重視されている。すべての学士課程の目的は、特定の分野における知識の向上に加えて、個々の学生の批判的思考能力と、学習方法を学習する能力を伸ばすことである。

多くの大学では、学生が専攻分野と副専攻分野を選択できるようになっている。副専攻分野は、専攻分野と関係が深い場合が多い。例えば、専攻が英文学で副専攻が演劇、専攻が歴史で副専攻が政治学、あるいはその逆、といった場合が考えられる。卒業するためには、少数の副専攻の単位も必要であり、これらは専攻科目の必要単位にも適用できる場合が多い。

一部の大学では、学生が指導教授と相談の上で、独自の専攻を作ることができる。また、ダブル・メジャー（二重専攻）を選ぶ



写真提供　Savannah College of Art and Design

ジョージア州のサバンナ・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザインで解剖学のノートを取る学生。

学生も増えている。ダブル・メジャーの学生は、２つの専攻科目の必要単位を取得して卒業する。２つの専攻は、例えば社会科学の分野に属する歴史学と社会学のように関連した科目である場合もあれば、生物学と文学のように全く異なる場合もある。多くの学生は、就職や大学院進学に有利な資格を得るために、複数の専攻科目を選ぶ。しかし、個人的な熱意からダブル・メジャーを選ぶ学生もいる。大学によって、ダブル・メジャーの両科目を同時に履修できる場合と、順次履修しなければならない場合がある。概して、ダブル・メジャーの学位取得には、通常より多少時間がかかるが、両方の専攻の課程を最初から履修する必要はない。一般教育科目、そして一方の専攻における選択科目の多くが、もう一方の専攻の必要単位として認められる。

どの大学も、学生が卒業に必要な条件や履修単位を明確に定めている。通常、学生は１学期ごとに指導教授と話し合い、学位取得に向けてどの講座を取るべきかを相談する。また、ほとんどの大学では、学生に、教科課程または必要単位チェックリストなどの支援ツールを提供している。

専攻科目をいつ決めるか

大学入学時に、何を専攻するかがはっきりと決まっている学生もいるが、明確に決めていない学生や、全く決まっていない学生もいる。学生の大半は、在学中に１度は専攻を変更する。

米国の学部生の３分の２近くが、卒業までに専攻を変えており、中には最終的に決めるまで４～５つの専攻を検討する学生もいることから、学生が大学に入学してから専攻を決めるほうが望ましいと考える大学も多い。入学願書の提出時に希望の専攻を記入することが求められている場合でも、普通は「未定」という選択肢を選ぶことができる。

通常、学士課程は、２学期制の場合、120単位を４年間で履修することによって修了できるようになっており（補足記事を参照）、学生に専攻を決める時間が無限にあるわけではないが、普通は２年生の終わりになってから決めても、４年間で卒業することが可能である。言うまでもなく、コミュニティーカレッジ（準学士号を授与する２年制大学）の学生は、それより早く専攻を決めなければならない。また、非常に技術的な分野や一部の医療関連分野のように、必要な講義の大部分が専攻科目による場合、あるいは、基礎必須科目（上級の授業を取るためにまず履修しなければならない基礎科目）の数が多い場合は、早めに専攻を決めておくことが望ましい。

専攻をどのように決めるか

自分が熱中できる科目を専攻する学生もいる。高校で成績の良かった科目を選ぶ学生もいる。また、看護、教師、芸術、工学など、希望する職業によって専攻が決まる場合もある。しかし、何を専攻すればよいのかわからない学生も多い。大学卒業後の職業に関する希望はあっても、その目標を達成するために何を勉強すれば最も有効かが明確にわかっていない場合もある。また、普通は、ひとつの専攻科目が特定のキャリアにつながるというわけでもない。事実、多くの大学では、職業の選択と専攻の選択は、全く別の過程であることに注意を促している。

写真提供　University of Mary Washington

バージニア州のメアリー・ワシントン大学で音楽を専攻する学生の生活は、「練習、練習」の毎日である。

学生が専攻分野を選ぶに当たっては、何をしたいか、どのような能力があるか、そしてどのような学び方をしたいかを考慮すべきであるということで、ほとんどの教育者の意見が一致している。専攻の選択に最も役立つ情報源のひとつは、大学である。多くの学校は、それぞれのウェブサイトで、入学希望者や在学生が選考を決める上で役立つ豊富な情報とツールを提供している。大学によっては、その大学の教科課程や各種サービスだけを掲載しているウェブサイトもあるが、あらゆる大学に当てはまる有益な情報を載せているサイトも多い（補足記事参照）。

Damian Dovarganes, AP/WWP

ペンシルベニア州のカーネギー・メロン大学の学生チームによる無人車が、ネバダ州で行われた競技会で入賞した。写真は、車にメダルを付ける学生。

最もよく見られるアドバイスには、以下のようなものがある。

●自分についてより深く知ること。得意科目、不得意科目は何か。何が好きか。何に興味があるか。どのような価値観を持っているか。卒業後の進路の目標は、就職か、大学院か。

●自分の性格や興味の対象を評価するテストを受けてみること。通っている中等教育の学校や地元でこのようなテストを受ける機会がない場合は、各国にある米国教育相談・情報センターに問い合わせるとよい。米国国務省は、EducationUSAプログラムを通じて、170カ国450カ所で同センターを運営している（http://www.educationusa.state.gov）。

●大学の各学部のウェブサイトを調べること。どのような専攻科目があるかを見る。講座の種類や学位取得の要件を検討する。講座の内容を詳しく述べた摘要を、ウェブサイトに載せている教授もいる。専攻科目で学位を取得するために必要な講座の種類や研究課題について詳しく知れば知るほど有利である。

●米国に到着したらすぐに、学内にある学部の事務局へ行き、教職員や学生と話をすること。

●大学の就職センターへ行き、最近の卒業生が選んだ専攻分野と就職先のリストを探すこと。

●入学したら、異なる学部のさまざまな講座を取ってみること。主な講座の教授陣について、またどのような学生が受講しているかについて調べる。

●専攻分野の選択を間違えたとしても心配しないこと。米国の大学生の大半は、途中で専攻を変えている。面白くない専攻科目、あるいは刺激やチャレンジのない専攻科目に固執する必要はない。

●専攻分野の選択と職業の選択を混同しないこと。どの専攻科目を選択しても、さまざまな職業に就く技能を身に付けることができる。ワシントン大学のウェブサイトに記されているように「大学教育は、雇用市場に向けて準備をするために役立つが、特定の職業のみに限定するものではない」（www.washington.edu/students/ugrad/advising/majchoos.html）

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

専攻分野の選択とキャリアの選択

専攻分野の選択には困難が伴うこともある。カレッジボード（大学入試委員会）発行の*Book of Majors*には、3600校の大学で学ぶことができる900種類以上の専攻分野が紹介されている。自分に合った専攻を選ぶ際に役立つ本はいろいろあるが、非常に有用な情報を無料で入手できる各大学のウェブサイトも調べてみる価値がある。

どの大学も、便覧やウェブサイトに、提供する専攻分野および学位の一覧を記載している。各専攻について理解し、選択をするために役立つ情報、ツール、資源が提供されている場合も多い。例えば、ミネソタ大学のウェブサイトの"Workbook for Choosing and Changing Your Major"（http://ucs1.ucs.umn.edu/www/majorworkbook.html）というページには、大学の専攻とキャリアとの関係について、以下のような情報が記載されている。

各種の専攻分野

職業の選択に密接なつながりのある専攻もあれば、特定の職業に直接つながる度合いの小さい専攻もある。キャリア開発という観点から、専攻分野は次の３種類に分けることができる。

特定の職業分野を志向しない専攻分野

特定の職業あるいは特定の分野における雇用を志向しない専攻である。このようなプログラムに関連する体験やインターンシップ体験を組み合わせると、特定の職業を志向した学位を取得できる。典型的な例としては、歴史学、政治学、社会学などの専攻がある。これらは、職場あるいは大学院での上級訓練に向けた準備となることもある。

特定の職業分野志向の専攻分野

特定の分野における雇用を目指すが、特定の職業を対象とはしていない。この種の学位を取得していると、研修生レベルの新入社員として採用されることになる。典型的な例は、ジャーナリズム、経営学、数学などである。

特定の職業志向の専攻分野

特定の職業のための具体的な訓練を行う専攻分野である。教育学、看護学、工学などのように、特定の職業における免許取得のための要件を満たすための課程であることが多い。

主な専攻分野一覧

農業
農業科学
畜産学
植物・土壌科学
農業経営学
放牧場経営学
農業機械学
園芸学
獣医学

コンピューター科学
コンピューター・情報科学
コンピューター・プログラミング
データ処理
情報管理学・情報管理システム
コンピューター数学
図書館学
博物館・文化財保存

教育
２カ国語・異文化間教育
特殊教育
カウンセリング
成人・継続教育
初等教育
就学前教育
中学教育
高校教育
美術・音楽・演劇教育
家政教育
保健体育教育
科学教育
職業･産業教育
実務教育
外国語教師教育
教養教育
社会科学教育
数学教育
コンピューター科学教育
宗教教育

工学
航空宇宙・航空工学
宇宙工学
農業工学

建築工学
生物工学
生医学工学
セラミック工学
化学工学
土木工学
通信工学
コンピューター工学
電気工学
電子工学
地質工学
地球物理工学
生産工学・設計
材料工学
機械工学
金属工学
鉱山・鉱物工学
海洋工学
造船工学
原子力工学
石油工学
測量地図作成
システム分析・工学

工学関連技術
製図
自動車工学・技術
電気技術
電気機械技術
環境・エネルギー管理技術
工学機械
職業安全・衛生技術
建設・建築技術
航空学・航空輸送
輸送・物流

英語・文学
英語学
古典・古典研究
比較文学
創作
言語学
アメリカ文学
イギリス文学
話法・修辞学
技術・商業文書

民族学
アフリカ研究
アメリカ研究
アジア・太平洋地域研究
ヨーロッパ研究
中南米研究
中東研究
アフリカ系アメリカ人（黒人）研究
アメリカ先住民研究
ヒスパニック・アメリカ人研究
イスラム研究
ユダヤ教・ユダヤ人研究

外国語
外国語・外国文学
中国語
日本語
アジア諸言語
ドイツ語
スカンジナビア語
フランス語
イタリア語
スペイン語
ポルトガル語
ラテン語
ギリシャ語
ヘブライ語
中東言語
ロシア語
スラブ言語（ロシア語を除く）

一般教養・学際的研究
人文科学
紛争解決・平和研究
女性学
一般教養課程
総合・学際的研究
個人に合わせた専攻

数学
数学
保険数理学
応用数学
統計学

軍事科学・保安
軍事科学
刑事司法・法執行
防火・安全

公園・娯楽資源
公園管理
スポーツ･娯楽・レジャー研究
馬術学
環境保全・保護
林産学
林業
野生生物・魚類管理
生態学
環境科学

哲学・宗教学・神学
哲学
宗教学・神学
哲学・宗教学
聖書の言語
聖書研究
宗教教育
宗教音楽
聖職者・教会管理

行政・法律
刑事司法・法執行
行政学
社会福祉事業・社会奉仕
法学部入学準備
法律助手

科学
生物学
生化学
生物物理学
植物学
細胞・分子生物学
微生物学・細菌学
動物学
海洋生物学
生物学専門分野
物理科学
天文学
天体物理学
大気圏科学・気象学
化学
地質学
物理学
地球・宇宙科学
科学技術

社会科学
人類学

考古学
犯罪学
経済学
地理学
政府
歴史学
国際関係学
政治学
心理学
社会学
都市研究

視覚・舞台芸術

工芸・伝統工芸
舞踏
デザイン
写真
演劇芸術
映画芸術
美術
音楽
インテリア・デザイン

(リスト作成 -- A2zcolleges.com.)

大学の学年度

ほとんどの学士号は、フルタイムで勉強すれば４年間で取得できるようになっている。学士号取得後は、就職をするか、さらに大学院で研究を続けることができる。コミュニティーカレッジ（あるいは短期大学）が授与する準学士号は、フルタイムで履修して２学年で取得することができる。準学士号取得後は、就職あるいは４年制大学で勉強を続けることができる。

ほとんどの場合、大学の学年度は、１学期15週間の２学期制である。*

学年度は８月または９月に始まり、５月または６月に終了し、通常は12月または１月に短い冬休みが入ることが多い。６月～８月の間に夏学期がある場合もあるが、通常、学部生は夏学期の授業を取らなくてもよい。

「学年」

Freshman（１年生）
Sophomore（２年生）
Junior（３年生）
Senior（４年生）

* このほかに、10～12週間ずつの３学期から成る３学期制、10週間ずつの４学期から成る４学期制もある。４学期制の場合、フルタイムの学生とみなされるためには、４学期中３学期間、授業を取らなければならない。

学士号取得要件

通常、学士号取得には、120履修単位が必要である（４学期制の場合は180単位）。ウィスコンシン州ミルウォーキー市にある教育認定評価サービスのマーガレット・シャッツマンは、以下のような履修単位計画を作成している。

フルタイムで登録している学部生は、一般に、１学期間に最低15単位、１年間で30単位を履修する。

１年生：１～30単位
２年生：31～60単位
３年生：61～90単位
４年生：91～120単位

理論講座

１学期間（15週間）にわたり、週に１回50分間の授業を受けると、１履修単位を取得できる。学部の理論講座は、通常３～４履修単位となっている。従って、３履修単位の講座を取る学生は、週に３回、50分ずつの授業に出席することになる。学部生の大半は、５講座計15履修単位を取得する。従って、１週間の受講時間はおよそ15時間となる。授業時間に加えて、教科書を読む課題、宿題、図書館でのリサーチ、試験勉強などの準備時間も必要である。

実験室、実務、実技（芸術・絵画など）講座

１学期間にわたり、週２～４回教室または実験室で50分間の授業を受けると、１履修単位時間を取得できる。すなわち、これらの講座を取る学生は、理論講座に比べると、２～４倍の時間を授業に費やすことになる。授業以外の準備は必要ではないか、あっても最小限である。例えば、２履修単位の実験講座を取る学生は、少なくとも週２回、50分間の授業を少なくとも２単位時間分取ることになる。

役に立つウェブサイト

米国の大学に入学しようとする人たちにとって有用なウェブサイトは多数あるが、その一部を以下に紹介する（著者の推薦による）。

カリフォルニア大学バークリー校
（http://ls-advise.berkeley.edu/choosingmajor/intro.html）
専攻とは何か、また２年目の終わりまでに専攻を決めるための準備や手段を説明し、専攻および職業選択に関する俗説を検証し、個々の学生の目標設定のアドバイスを提供している。

ミネソタ大学
（http://ucs1.ucs.umn.edu/www/majorworkbook.html）
ジョン・ホランド博士が開発した、関心、技能、価値観、性格の人物調査表を含むオンライン・ワークブックで、学生は自分がどのタイプに分類されるか、そしてどの専攻に最も向いているかを調べることができる。

オクラホマ州立大学
（http://home.okstate.edu/homepages.nsf/toc/chp15_1）
「College Prep 101」という資料で、入学前に必要な準備や入学後に必要となる知識などに関する詳細なアドバイスを提供している。専攻科目の選択に関する説明もある。

ペンシルベニア州立大学
（http://www.psu.edu/dus/md/mdmisper.htm）
専攻に関する一般的な誤った認識を取り上げ、専攻の選択と職業の選択は同じではないこと、ひとつの専攻を選んだら他の科目を学べなくなるわけではないこと、などを説明している。

ペンシルベニア大学
(http://www.college.upenn.edu/curriculum/major_factors.html)　学生が自分の関心、意欲、目標を特定するためのチェックリストを提供している。

学部の授業体験

リンダ・トバシュ

Michael Conroy, AP/WWP

学生は、授業での討論に参加することが期待される。

学生に要求されることは、講座によって、また教授によって異なるが、概して米国の大学生は、授業での討論や活動に参加し、講座を通じて課題を提出することを要求される。最終的な成績は、中間試験と期末試験、およびその他の学習課題に基づいて決められる。本稿では、国際教育研究所大学進学サービス担当ディレクターのリンダ・トバシュが、大学での授業の進め方について説明する。

一般に、米国の大学の学部の授業では、学生が積極的に学習活動に参加することが期待される。教授によって教え方や学生に要求することは異なるが、学生が能動的学習者となることを期待される場合が多い。通常、最初の授業では、教授が講座の摘要を学生に配る。あるいは、摘要が掲載されているウェブサイトを見るように言われる場合もある。摘要には、講座の目的、読書･研究課題、成績評価の方針、出席基準などのほか、講師の手法や哲学が紹介されていることも多い。一般に、教授が学生に期待することとしては、以下のようなものが挙げられる。

●授業に出席すること。多くの大学では、教授が出席基準を設定する。一方、大学全体で、例えば、欠席は３回までしか認められないなど、出席基準が決められている場合もある。出席状況を調べる学校は珍しくなく、中にはそれを義務付けている大学もある。出席状況が悪いと、最終的な成績に影響が及ぶことが多い（補足記事参照）。また、抜き打ちテストを行う教授もいるため、授業を休んだためにそうしたテストを受けられなければ、成績に響くこともありうる。

● **授業のための準備をすること**。通常、講座の摘要に、すべての課題が記されている。学生は、授業で取り上げられる資料を事前に読み、授業で討論できるように準備をすることを期待される。学生が研究グループに分かれて、共同で学習することを求められる場合もある。大学案内には、授業内容に遅れないよう勉強することの重要性が強調されていることが多い。学習すべき内容はかなり多く、いったん遅れると追いつくことは非常に難しい。従って、常に授業に付いていくことが重要である。

写真提供　Eastern Mennonite University
バージニア州のイースタン・メノナイト大学で実験をする学生たち。

●課題をすべて期日までに提出すること。通常、レポートなどの課題の提出が遅れると、成績が下がる。いかなる事情があっても期日の過ぎた課題の提出を認めない教授もいる。

●授業に積極的に参加すること。受講者数が200人を超えるような大講義室での授業では、教授と学生の間の討論は限られてしまうかもしれないが、受講者のはるかに少ない授業も多く、その場合にはクラス討論へ参加する能力が成績評価のひとつの要素となることが多い。学生は、質問に答えるだけでなく、質問することも期待される。一般に、授業の目的は、学生が学んだことを総合して、独自の意見を形成することである。すなわち、学生は、授業内容を習得するだけでなく、その科目、テーマ、内容について独自の意見を持ち、それを発表し、その正しさを証明することを期待される。

では、学部の学生はどのような講座を取ることができるのだろうか。学部の講座の種類はさまざまである。１年生のときには、100人以上が受講するマンモス講義を取るのは珍しくない。こうした大講義では、通常、授業で取り上げられる内容が非常に多く、学生は詳しいノートを取ることが必要である。小テストが頻繁に行われることもある。また、学生が小グループに分かれ、対面（F2F）方式あるいはインターネット学習プログラムを使って議論するよう求められる場合もある。

しかし、講座の大半は、より小規模な30～40人のクラスであり、学生の積極的な授業参加が極めて重要である。授業のレベルが高度になると、クラスの規模が小さくなることが多く、学生数10人以下のゼミ形式のクラスもある。このようなクラス環境では、やはり授業の準備をすることと、積極的に授業に参加することが非常に重要である。

このほかにも、特に自然科学や数学の分野では、実験を中心とする実験室での授業がある。美術の分野では、多くの授業がスタジオで行われ、概念を学び、プロジェクトに取り組む。同様に、

成績評価

米国で最も広く使われている成績評価の尺度は、Ａ～Ｆ（０～４）の５段階評価である。

A = 4
B = 3
C = 2
D = 1
F = 0（落第。Eという場合もある。）

このほかにも以下のような評価がある。

I = 履修未了
W= 履修取り消し
WU = 非公式の履修取り消し
Audit= 聴講：授業に出席し課題を提出するが、単位は取らず、成績も付かない。
Pass/Fail= 合格または不合格：合格か不合格かだけの評価を受ける。合格のための具体的な成績基準はない。
Pass/No Credit= 合格または単位なし：合格か単位なしの評価を受ける。不合格はない。

課題の評価や最終的な成績評価の基準は、各教授が独自に決める。通常、そうした基準は講座の摘要に記載されており、最初の授業で説明される。多くの場合、教授は試験やレポートの採点方法についても説明する。最終的な成績が、１回のレポートあるいは試験で決まることはめったにない。普通は、例えば以下のような要素の組み合わせによって、最終的な成績評価が決まる。

- % 授業出席率
- % 小テスト
- % 中間試験
- % 期末試験
- % 期末レポート

舞踏、演劇、声楽あるいはその他の音楽専攻の学生は、練習と実演を中心とする授業を受ける。

学生は、自主研究の講座を取ることもできる。この場合、通常は、学生が教授と相談の上、個人研究やレポートの作成、教授との面談スケジュールなど、履修計画を作成する。

対面方式の授業とインターネットを利用した遠隔授業のどちらかを学生が選択する大学も増えている。教室での授業とインターネットでの授業を両方取る学生も珍しくない。また、遠隔授業を取らなくても、教授がウェブサイトに参考情報や課題を掲載したり、参考資料を紹介する例が増えている。

写真提供　Johnson C. Smith University

ノースカロライナ州ジョンソン・C・スミス大学の学生寮の一部屋。寮の部屋は、学生が眠り、学び、リラックスする場所となっている。

従って、大学が導入しているインターネット授業の機能に慣れておくことが重要である。

学位取得のための学習の一環として、インターンシップに参加する学生もいる。インターンシップの目的は、実社会での体験によって学習を補足するとともに、選んだ専攻分野が本当に自分に向いているかどうかを知る機会を作ることである。通常、学生は、自分の専攻と非常に関係の深い企業でインターンとなる。インターンシップが学位取得のための単位となる場合は、定期的に教室でのミーティングにも出席し、インターン体験について話し合うことを要求されることも多い。インターンに給料が支払われる場合もあるが、無給あるいは最小限の報酬しか受け取れないことが多い。工学など一部の分野では、夏休みにインターンシップに参加することが非常に望ましい。通常、夏休みのインターンシップは、大学の単位とはならない。

サービスラーニングを講座に取り入れたり、カリキュラムの一環として学生にサービスラーニング活動をさせたりすることも、有効なモデルである。サービスラーニングでは、学生が教室で学んだことを特定の地域社会での問題解決に活かすことに重点を置いている。その目的は、地域社会を援助することに加えて、学生に市民としての責任感を植え付け、民主主義と社会参加に対する認識を高めることである。

Wade Bruton/UNC Charlotte

米国の大学にある、さまざまな種類の教室のひとつである大講義室で行われている経営学の講義に出席するノースカロライナ大学シャーロット校の学生。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

米国の大学で学ぶためにかかる費用

Linda A. Cicero/Stanford News Service

卒業式で、大学教育を受けさせてくれた両親の苦労に感謝を表す学生たち。

米国の大学生の大半は、家庭の貯蓄、学資ローン、奨学金、あるいはアルバイトなどの資金源を組み合わせて学費を払っている。留学生は、これらの選択肢をすべて利用することはできないかもしれないが、本稿では、学資援助に関する情報源を紹介する。

米国の大学の学費は非常に高い。４年制の有名大学では、年間の授業料が５万ドル近くにもなる。これには、住居費、交通費などの生活費は含まれていない。もちろん、これより学費が安く、しかも教育レベルが高い大学もある。４年制大学のほとんどは、年間の学費が少なくとも１万ドルであり、２万～３万ドルとなる大学が多い。米国の家庭では、子どもの教育費が大きな出費のひとつとなっている。子どもが生まれたときから教育のための貯蓄を始める家庭も多く、こうした貯蓄を促進する奨励策を採用している州もある。

大学の授業料が高いとはいうものの、これだけでは、大学が提供する教育の費用をすべてまかなうことは到底できない。建物、設備、給与などのコストは上昇を続け、先端技術の発展により実験室など専門施設のコストが急増している。大学は、常に、地方・州・連邦政府だけでなく、財団、企業、産業からの資金援助を求めている。

それでも、大学入学を目指す学生にとっては、費用が難関となることもある。高校あるいは大学在学中にアルバイトをして、大学の授業料や教科書代、交通費、住居費などを貯める学生もいる。大学は、費用を賄えるよう、学生にキャンパス内または大学の近くのアルバイトを紹介している。コミュニティーカレッジの成功の一因は、仕事を持つ成人が夜間や週末に授業を受けられるようにするなど、フルタイムまたはパートタイムの職業人とフルタイムまたはパートタイムの学生の兼業を可能にしたことである。第２次世界大戦以降、米国では、兵役に従事した者に対する重要な特典のひとつとして、大学へ行く道のなかった多くの退役軍人に高等教育への門戸を開くための財政支援を提供する「復員兵援護法　（ＧＩ法）」を成立させ、復員兵に授業料の援助を提供している。

家庭の貯金のほかに主な学資源となっているのは、学資ローン

と補助金である。ローンは、利子を付けて返済しなければならないが、学資ローンの金利は、他の一部のローンに比べると低い。入社後しばらくは学資ローンの返済に追われる新入社員も多い。奨学金をはじめとする補助金は、贈与されるものであり、返済の必要はないが、補助金を受けるためには、一定の成績を維持すること、あるいは援助の必要性を証明することなどの条件を満たなさなければならないことが多い。奨学金の獲得には競争があり、通常、学業成績、運動能力、市民活動など、学生本人または家族が満たさなければならない基準に基づいて審査される。こうした補助金を特定し、獲得する手続きは、分かりにくく、申請用紙を目にすると各家庭がやる気をそがれてしまう場合もある。大学、高等教育機関、およびその他の組織には、学資援助に関する情報収集を助けるオフィスが設けられている。

まして、留学生にとって、このプロセスがいかに困難なものであるかは、想像に余りある。無料または無料に近い費用で教育を提供する国、あるいは米国よりはるかに教育費の安い国も多い。米国の大学に進学したいが、小学校入学時から大学に備えて貯金をしていない留学生に、どのようなオプションがあるのだろうか。

米国への渡航について説明した*eJournal USA* 2005年9月号の"See You in the USA"（http://usinfo.state.gov/journals/itps/0905/ijpe/ijpe0905.htm）には、特にビザの問題など、学生に関係のある情報が多く記載されている。ガーナのアクラ市で国務省のアフリカ担当地域教育指導コーディネーターを務めるナンシー・W・ケテクが、"U.S. Higher Education, the Financial Side"という記事を書いている。皆さんには、この記事も含め、2005年９月号の*eJournal USA*をぜひ読んでいただきたい。　以下は、ケテクの記事の抜粋である。

米国の大学へ留学を希望している方であれば、米国では、中央政府が教育制度を管理している国に比べて教育費が高いことに気が付かれたかもしれない。しかし、米国の教育は、コスト・パフォーマンスも極めて高く、投資に対する見返りが大きいことにも気付いていただけたと思う。

米国で教育を受けるためのコストを抑制する方法をいくつか紹介する。

●各地のEducationUSAセンターは、国務省の支援を受けた公的機関として学生に情報を提供している。最寄りのEducationUSA　センターについては、http://www.educationUSA.state.gov/centers.htmを参照。

●EducationUSA相談センターでは、特に、The College Board International Student HandbookとPeterson's Applying to Colleges and Universities in the United Statesの２冊を参考にするとよい。

●米国政府を通じて得られる援助。米国政府主催のプログラムは、ほとんどが大学院生を対象としている。これらは、２国間合意に従い、米国大使館広報・文化交流部（ＰＡＳ）または米国開発庁(USAID)を通じて実施されている。

●奨学金斡旋業者。不正な奨学金斡旋業者も多いため、注意が必要である。原則として、いわゆる「奨学金斡旋」業者が、情報提供の手数料を取る場合は、いかにパンフレットやうたい文句が立派でも、極めて慎重な対応が必要である。

授業料その他納付金と、大学生活のための総経費

授業料は、米国で大学教育を受けるために必要な経費のごく一部にすぎない。大学教育の費用には、その他の納付金も含まれる。これは学生全員が学期ごとに支払う場合もあれば、受講する講座に応じて支払う場合もある。このほかに、住居費、教科書その他の教材費、食費、健康保険料と医療費、日常の交通費（駐車料金も含む）、帰省費用、電話・インターネット料金なども支払わなければならない。通常、公立大学では、留学生は州外の学生として、州の住民である学生より授業料が高い。

時間の投資も考慮する必要がある。学生として学んでいる間は、収入が得られない。働きながら学ぶとしても、フルタイムの仕事に比べて勤務時間が短く、給料も安い場合が多い。次ページのワークシートが、大学教育の総経費の見積もりに役立つはずである。

大学生の経費見積もりサンプル

項目	金額	学期数	合計金額
出願料			
入学試験料			
授業料			
登録遅延金			
住居費			
食費			
教科書・教材費			
駐車料金			
自動車保険料			
その他の自動車関連費用			
日常の交通費			
帰省のための交通費			
学生証再発行料			
スポーツセンター使用料金			
成績証明書発行手数料			
図書館使用料			
コピー料金			
マイクロィルム料金			
娯楽費			
合計			

学資援助の可能性

マルティナ・シュルツ

外国人留学生（主に大学院生）が受けることのできる学資援助の種類、そして応募のこつを、専門家が説明する。マルティナ・シュルツは、在ハンブルク（ドイツ）米国総領事館文化担当専門館兼ハンブルク・アメリカンセンター教育相談コーディネーター。

毎年50万人の外国人留学生が、米国の大学から入学許可を受けている。国際教育研究所によると、そのうちおよそ67％が、米国留学の資金を家族に出してもらっている。しかし、多くの留学生にとっては、十分な学資援助を受けられるよう申請することも、願書提出の重要な要素となっている。留学生が米国の大学で学ぶためには、１学年で平均１万6000～４万6500ドルの授業料と生活費が必要である。

留学生が受けられる学資援助

自費留学以外の学生は、主に留学先の大学（全体の23％）、次いで自国の政府または大学（2.4％）から資金提供を受けている。しかしながら、学部の学生と大学院生を比べると、かなり事情が異なる。学部では、留学先の大学から学資援助を受けている留学生は、全体のおよそ10％にすぎないが、大学院生の場合は、41％が留学先の大学から援助を受けている。その多くは、博士課程あるいは研究機関で、研究助手や授業助手を務めている。また、修士課程より博士課程の方が、学資援助が多く、社会科学・人文科学より自然科学の分野の方が利用できる援助が多い。さらに、専門職課程より学問的な研究課程の方が一般に援助資金が多い。入学後２年目を迎えると、留学先の大学から学資援助を受けられるチャンスが増える。

米国における学資援助の種類

主に私立の大学では、学部留学生は、一部給付奨学金を申請することができる。また、スポーツ奨学金や学資ローンを受ける資格も有する。大学院生の場合は、公立大学でも私立大学でも、研究助手、授業助手、事務補佐を務めたり、特別研究奨学金や奨学金の受給資格がある。また、大学院生も学資ローンを申請することができる。

学資援助の申請を認めてもらうためのヒント

早めに準備や調査を始めること。できれば、留学開始の15～18カ月前から準備を始めることが望ましい。自国の政府や大学が提供する奨学金について調べ、早期に申請を行う。

詳しい調査をすること。EducationUSAが支援する相談センターを訪れ、米国の大学や、自分が在籍する可能性がある各学部で得られる学資援助に関する専門的な参考資料を調べる。また、願書を提出する４～６校の大学について、インターネットでできる限り詳しい情報を入手する。大学院生は、出願前にインターネット検索で担当教授について調べることができる。大学院生の合否を決定するのは担当教授であるため、教授が願書を審査する前に、教授に連絡を取っておくべきである。

遠慮せず積極的に学資援助について問い合わせること。最初の援助申請が通らなくても、もう一度、学部または入学事務局の特定の個人あてに手紙を出してみる。１回目にうまくいかなかった場合は、電話をかけて、その理由を尋ね、翌年さらに条件を整えて再び申請する。

最後になるが重要なこととして、留学生のための学資援助は限られており、競争率が極めて高い。成功率を高めるためには、学業成績が非常に優れていることを示さなければならない。TOEFL、SAT、GMAT、あるいはGREで高得点を取れるようよく勉強をし、ある程度の私費があることを証明するか学資援助の必要性を証明し、十分な調査に基づいて作成した、きちんとした完璧な願書を提出する必要がある。

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

外国人留学生を歓迎する米国のコミュニティーカレッジ

ジェニファー・バーチャム
（コミュニティーカレッジ・タイムズ紙から転載）

2005年の第57回NAFSA：国際教育者協会（旧称「全米外国人学生支援協会」）年次大会でのスピーチで、ジャニス・ジェイコブス国務次官補代理（ビザサービス担当）は、米国で学ぶことを希望する留学生を米国が心から歓迎していること、そして海外の米国の在外公館は学生や交流訪問者を優先するよう指示を受けていることを強調した。ジェイコブス次官補代理は、2001年9月11日の同時多発テロによって国務省のビザ申請手続きが多少変更されたが、ビザ申請に関する国務省の方針が、米国訪問あるいは米国留学を阻む障害となっているとの見方は間違っている、と述べた。次官補代理は、「ビザ申請処理の変更に関する、一般の人々の時代遅れの認識は、現実とかけ離れています。国務省は、多くの留学生、交流訪問者、研究者、そしてビジネスマンが再び米国を訪れるようになるよう、一生懸命努力しています・・・」と語った。

ジェイコブス次官補代理は、この大会で、「留学生を歓迎する米国のコミュニティーカレッジ―国務省の役割（Welcoming International Students to Community Colleges in the U.S.-The Role of the State Department）」と題したプレゼンテーションを行い、国際教育においてコミュニティーカレッジが果たしてきた役割について次のように語った。「コミュニティーカレッジ制度が提供する素晴らしい教育機会を留学生が利用できるようにするにあたり、全米のコミュニティーカレッジがますます積極的な役割を果たしています」

２年制大学への留学を希望する学生はビザ申請を拒否されることが多いのではないかという、２年制高等教育機関関係者の懸念に対して、ジェイコブス次官補代理は、さまざまな教育機関が異なる学生のニーズを満たしていることについて、国務省は各地の領事担当官に念を押した、と述べた。領事担当官は、米国の教育機会の多様性を念頭に置いて、どのケースも個別に検討するよう指示されているという。

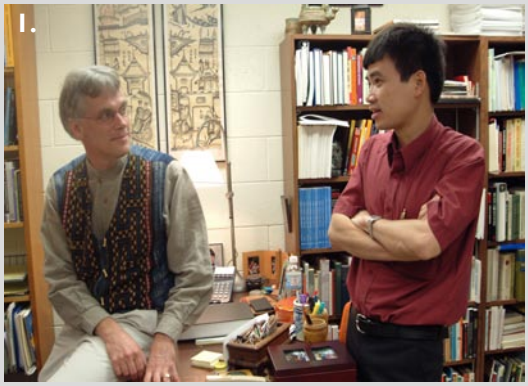
また、国務省は、2001年９月以来、領事担当官のポジションを350以上増やすことによって、学生ビザ申請の処理能力を向上させており、今期予算では、さらに121のポジション増が要請されている。

ジェイコブス次官補代理によると、ビザ申請の大半（およそ97％）は、２日間以内で処理され、また安全保障上特別な審査を必要とするビザ申請（全体の2.5％）についても、審査のプロセスが効率化されている。「全体の2.5％に当たる、安全保障上の理由で特別な審査を必要とするビザ申請の審査プロセスを効率化したため、全体から見ればわずかなこれらの申請者も、迅速な回答を得ることができます。１年前には微妙なケースの処理には平均およそ74日間かかっていましたが、現在では平均14日間となっており、さらにこのプロセスを効率化しています」

次官補代理は、米国国際教育研究所のデータによると2003学年度には57万2000人以上の外国人学生が米国の大学に在籍していた、と述べた。中でも留学生の数が多いのはインド、中国などである。米国の大学に留学する外国人学生の数が減少しているとはいえ、現在も米国で学ぶ留学生の数はほかのどの国よりも多い。

「米国が留学生を歓迎しないという誤った認識が海外に残っているとしたら、私たちは何としてもそうした認識を一掃したいと考えています。それは全くの誤解です。マスカットからムンバイまで米国で勉強することを希望する世界中の学生には、私たちの門戸が広く開放されているということをぜひ理解していただきたいと思います」

外国人留学生アドバイザーとは？



写真提供　Eastern Mennonite University

Morgan Mukarram/LeMoyne-Owen College

1. バージニア州のイースタン・メノナイト大学でアドバイザーに相談する留学生。

2. ナイジェリアの歴史学者タユデーン・バダモシは、フルブライト客員研究員として、１年間テネシー州の伝統的黒人大学レモイン・オーウエン大学に在籍している。国際的に知られたイスラム史およびイスラム文化・文明の権威である同氏は、学生にその見識を伝えており、同大学はそのような機会を持てたことを歓迎している。

3. ミシシッピ大学で留学生のためのオリエンテーションを受ける韓国人学生たち。丸１日をかけて行われるオリエンテーションで、留学生は、同大学での学生生活に関する説明を受けるとともに、１学期目の履修登録をすることができる。

Robert Jordan, AP/WWP

国際教育者協会（旧称「全米外国人学生支援協会(NAFSA)」）は、国際教育を促進する組織である。NAFSAの肝いりでIntercultural Press社が2000年に出版した*The Profession of Foreign Student Advising*は、留学生アドバイザーの役割について、以下のように説明している。

留学生アドバイザーは、世界各国から集まる留学生や研究者のためのアドバイザーとして、彼らが米国でできる限り生産的な留学・研究生活を送れるようにするための情報、プログラム、およびサービスを提供する。アドバイザーは、外国人留学生や研究者と、彼らが接触する人々との間の連絡役を務め、留学生たちの利益を代表し、それに沿ったアドバイスをする。

留学生アドバイザーは、アメリカ人が「留学生」と呼ぶ多様な人々のグループだけでなく、アメリカ人学生、教職員、地元の住民、米国および外国の政府機関関係者、そして海外からの留学生や研究者を後援するさまざまな機関とも協力する。そして、海外からの留学生や研究者と、彼らを受け入れる地元のアメリカ人との間に、建設的な関係を築くことを促す。

留学生アドバイザーは、各大学、地域社会、そして世界中に、国際教育交流の恩恵をもたらすべく活動している。彼らの働きにより、さまざまな国から訪れる人々が、ほかの国の人々について理解し、その過程で、この相互に依存する世界の市民として、より寛大で偏見のない心を育てることができる。

詳しくは、http://www.nafsa.orgを参照。

参考文献

米国の大学教育に関する参考文献

U.S. Department of State. Bureau of Educational and Cultural Affairs. *If You Want to Study in the United States* Series. Washington, DC: 2002-2003. http://www.educationusa.state.gov/pubs.htm

この包括的シリーズの１～３巻は、現在、次の各言語で出版されている：アラビア語、中国語、英語、フランス語、ロシア語、スペイン語。各巻の内容は、「第１巻 - *学士課程(Undergraduate Study)*」「第２巻 - *大学院および専門研究(Graduate and Professional Study and Research)*」「第３巻 - *短期留学、英語講座、遠隔教育、認定(Short-Term Study, English Language Programs, Distance Education, and Accreditation)*」。「第４巻 - *留学の準備：米国留学生活の実践情報(Getting Ready to Go: Practical Information for Living and Studying in the United States)*」は、中国語版、英語版、およびロシア語版がある。http://www.educationusa.state.gov/life/pubs.htm

Andrews, Linda Landis. *How to Choose a College Major*. New York: McGraw-Hill Companies, 2006. （出版予定）

Ashley, Dwayne and Williams, Juan. *I'll Find a Way or Make One: A Tribute to Historically Black Colleges and Universities*. New York: HarperTrade, 2004.

College Board. *International Student Handbook 2006*. New York: The College Board, 2005.

College Board. *Trends in College Pricing, 2005*. New York: The College Board, 2005. http://www.collegeboard.com/prod_downloads/press/cost05/trends_college_pricing_05.pdf

College Board. *Trends in Student Aid, 2005*. New York: The College Board, 2005. http://www.collegeboard.com/prod_downloads/press/cost05/trends_aid_05.pdf

College Board. *The College Board Book of Majors*. New York: The College Board, 2004.

CSIET: Council on Standards for International Educational Travel. *Advisory List of International Educational Travel and Exchange Programs*. Alexandria, VA: CSIET, 2005. http://www.csiet.org/mc/page.do?sitePageId=748

Denslow, Lanie; Tinkham, Mary; and Willer, Patricia. *U.S. Culture Series: Introduction to American Life*. Washington, DC: NAFSA: Association of International Educators, 2004. http://www.nafsa.org/publication.sec/international_students/u.s._culture_series

Forest, James J.F. and Altbach, Philip G., eds. *The International Handbook of Higher Education*. New York: Springer, 2005. http://www.higher-ed.org/handbook/TOC.pdf

Forest, James J.F. and Kinser, Kevin. *Higher Education in the United States: An Encyclopedia*. New York: ABC-CLIO Publishers, 2002.

Gose, Ben et al. "Community Colleges: Special Issue." *The Chronicle of Higher Education*, vol. 52, no. 10, 28 October 2005, pp. B1-B44.

Green, Madeleine and Turlington, Barbara. *A Brief Guide to U.S. Higher Education*. Washington, DC: American Council on Education, 2001. http://www.acenet.edu/bookstore/pdf/2001_brief_guide.pdf

Greene, Howard et al. *The Public Ivies*. New York: HarperTrade, 2001.

"Historically Black Colleges and Universities: Special Section." *Ebony*, vol. 60, no. 11, September 2005, pp. 73-130.

Independent Colleges and Universities: A National Profile. Washington, DC: National Association of Independent Colleges and Universities, 2004. http://www.naicu.edu/pubs/2004Profile.pdf

全米独立大学協会(NAICU)、独立大学協議会、および独立高等教育財団が共同で出版したこの冊子は、各大学に関する情報、統計、そして学生や教職員のプロフィールを紹介している。

Institute of International Education. *Funding for United States Study* Series: *Funding for U.S. Studies: A Scholarship Guide for Europeans*. New York: IIE, 2005. http://www.iiebooks.org/funforunstat.html

Institute of International Education. Funding for *United States Study* Series: *Funding U.S. Studies: Graduate and Postgraduate*

Opportunities for Latin Americans. New York: IIE, 2004. http://www.iiebooks.org/funforunstat.html

Kalmar, George, ed. *Foreign Students' Guide to American Schools, Colleges, and Universities*. Santa Monica, CA: International Education Service, [2005]. http://www.ies-ed.com/

Lanier, Alison Raymond et al. *Living in the U.S.A.* 6th ed. Yarmouth, ME: Intercultural Press, 2004.

Latimer, Jon, ed. *Applying to Colleges and Universities in the United States 1998: A Handbook for International Students*. Lawrenceville, NJ: Peterson's, 1997.

Lipka, Sara. "Fulbright Connects With the Muslim World." *The Chronicle of Higher Education*, vol. 52, no. 11, 4 November 2005, pp. A47-A49.
各種の表と、本年のフルブライト奨学生３人のプロフィールを掲載。

Open Doors: Statistics on International Student Mobility. New York: Institute of International Education, 2005.
一部の表はウェブサイトにも掲載。Open Doors: Report on International Education Exchange: http://opendoors.iienetwork.org/

Riley, Naomi Schaefer. *God on the Quad: How Religious Colleges and the Missionary Generation Are Changing America*. New York: St. Martin's Press, 2005.

Rothblatt, Sheldon. *The Living Arts: Comparative and Historical Reflections on Liberal Education*. Washington, DC: Association of American Colleges and Universities, 2003.

Smithee, Michael; Greenblatt, Sidney L.; and Eland, Alisa. *U.S. Culture* Series: *U.S. Classroom Culture*. Washington, DC: NAFSA: Association of International Educators, 2004. http://www.nafsa.org/publication.sec/international_students/u.s._culture_series_1

Twelve Facts That May Surprise You About America's Private Colleges and Universities. Washington, DC: National Association of Independent Colleges and Universities, 2003. http://www.naicu.edu/pubs/NAICU12FactsNew.pdf

U.S. Department of State. Bureau of International Information Programs. "Community Colleges in the United States." *eJournal USA: U.S. Society & Values*, vol. 7, no. 1, June 2002, 26 pp. http://usinfo.state.gov/journals/itsv/0602/ijse/ijse0602.htm

U.S. Department of State. Bureau of International Information Programs. "See You in the U.S.A." *eJournal USA: Foreign Policy Agenda*, vol. 10, no. 2, September 2005, 52 pp. http://usinfo.state.gov/journals/itps/0905/ijpe/gough.htm

U.S. Department of State. Bureau of International Information Programs. "The United States in 2005: Who We Are Today." *eJournal USA: Society & Values*, vol. 9, no. 2, December 2004, 48 pp. http://usinfo.state.gov/journals/itsv/1204/ijse/ijse1204.htm

米国の高等教育および米国留学に関するその他の出版物については、*If You Want to Study in the United States* Series（Washington, DC: 2003-2004）に基づく以下のオンライン参考文献を参照。

●大学院：http://www.educationusa.state.gov/graduate/biblio.htm

●米国での生活：http://www.educationusa.state.gov/life.htm

●研究者のための諸制度： http://www.educationusa.state.gov/scholars/biblio.htm

●出発前の情報： http://www.educationusa.state.gov/predeparture/biblio.htm

●専門研究： http://www.educationusa.state.gov/professional/biblio.htm

●短期留学：http://www.educationusa.state.gov/study/biblio.htm

●学部：http://www.educationusa.state.gov/undergrad/biblio.htm

米国国務省は、他の機関・組織が発行する上記の各資料の内容および入手の可能性については責任を負わない。インターネット・リンクはすべて2005年11月現在有効なものである。

役立つウェブサイト

米国の大学教育に関するウェブサイト

米国国務省

Bureau of Educational and Cultural Affairs
EducationUSA
http://www.educationusa.state.gov/
EducationUSAは、「留学先の大学を探す外国人学生のために、そのあらゆる段階で豊富な情報とサービスを」提供している。世界170カ国450カ所の相談・情報センター（http://www.educationusa.state.gov/centers.htm）で構成される国際ネットワークを通じて「米国での教育機会に関する正確、包括的、客観的、かつタイムリーな情報と、これらの機会を利用するためのガイダンスを適格な人材に提供することによって、世界各地で米国の高等教育を積極的に宣伝している」。このウェブサイトには、大学認定、大学の探し方、ビザの申請、学資援助、フルブライト奨学金、および国務省教育文化局の各種制度などに関する情報が掲載されている。

International Education Week, 2005
http://iew.state.gov/
国際的な教育と交流を祝福することを目的とする、米国国務省と教育省の共同イニシアティブ

International Information Programs
Study in the U.S.
http://usinfo.state.gov/scv/life_and_culture/education/study_in_the_us.html

Bureau of Consular Affairs: Visas
http://travel.state.gov/visa/visa_1750.html

Studying in the USA: Visas
http://www.unitedstatesvisas.gov/studying.html

米国教育省

USNEI: U.S. Network for Education Information
http://www.ed.gov/about/offices/list/ous/international/usnei/edlite-index.html
交換留学生に情報を提供することを目的に作られた、米国の教育制度に関する基礎的な資料。

Federal Student Aid: International Students
http://studentaid.ed.gov/PORTALSWebApp/students/english/intl.jsp

IPEDS College Opportunities Online
http://nces.ed.gov/ipeds/cool/index.asp

Office of Postsecondary Education
Database of Accredited Institutions
http://ope.ed.gov/accreditation/

米国市民権・移民サービス局

How Do I Become an Academic Student in the United States?
http://uscis.gov/graphics/howdoi/academic.htm

ボイス・オブ・アメリカ

America's Global College Forum
http://www.voanews.com/english/AmericanLife/global_college_forum.cfm
米国の大学で学んでいる留学生のプロフィールを毎週紹介する番組。

ホワイトハウス

Initiative on Educational Excellence for Hispanic Americans
http://www.yic.gov/

Initiative on Historically Black Colleges and Universities
http://www.ed.gov/about/inits/list/whhbcu/edlite-index.html

Initiative on Tribal Colleges and Universities
http://www.ed.gov/about/inits/list/whtc/edlite-index.html

その他

American Association of Community Colleges
http://www.aacc.nche.edu/

American Council on Education
http://www.acenet.edu//AM/Template.cfm?Section=Home
全米教育協議会（ＡＣＥ）は、米国のあらゆる高等教育機関の調整役を務める主要組織として、多数の国際的イニシアチブも主催している。http://www.acenet.edu/AM/Template.cfm?Section=International.

American Indian Higher Education Consortium
http://www.aihec.org/

AMIDEAST, America-Mideast Educational and Training Services, Inc.
http://www.amideast.org/

Association of American Colleges and Universities
http://www.aacu-edu.org/

Campus Compact
http://www.compact.org
「キャンパス・コンパクト」は、大学の学長から成る全国的な連合で、「高等教育における社会奉仕、市民活動への参加、およびサービスラーニングの促進に力を入れている」

CHEA: Council for Higher Education Accreditation
http://www.chea.org/
認定教育機関およびプログラムのデータベース： http://www.chea.org/search/default.asp

The Chronicle of Higher Education
http://chronicle.com/
購読制。一部無料で入手できる資料もある。http://chronicle.com/free/

College Board
http://www.collegeboard.com/splash

Community Colleges USA
http://www.cc-usa.org/

Council of Independent Colleges
http://www.cic.org/

Council on International Educational Exchange (CIEE)
http://www.ciee.org/

eduPASS!
http://www.edupass.org/

Higher Education Resource Hub
http://www.higher-ed.org/

Hispanic Association of Colleges and Universities
http://www.hacu.net/

Institute of International Education
http://www.iie.org/

National Association for Equal Opportunity in Higher Education (NAFEO)
http://www.nafeo.org/about.htm

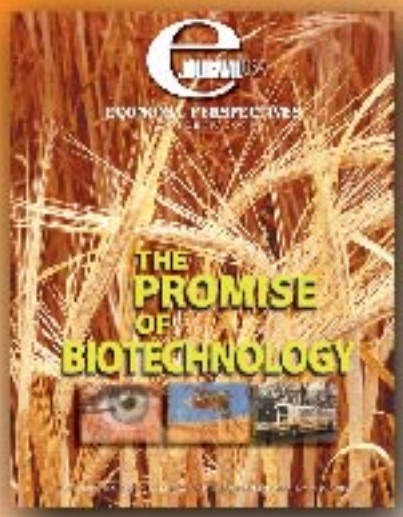
Association of International Educators (NAFSA)
http://www.nafsa.org/

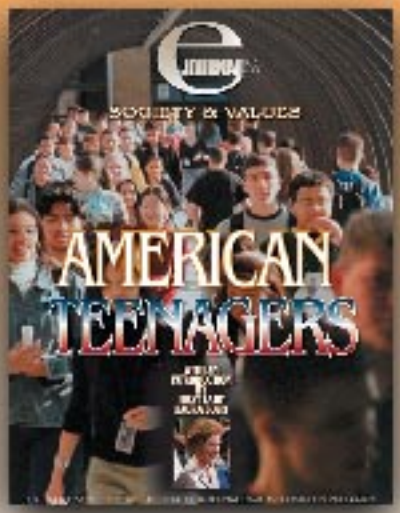
National Association of State Universities and Land-Grant Colleges
http://www.nasulgc.org/

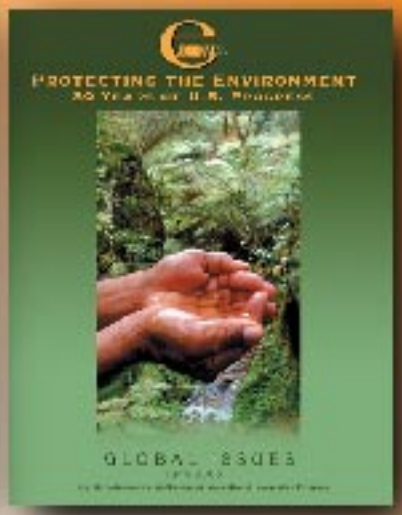
University of Texas at Austin
Web U.S. Higher Education
http://www.utexas.edu/world/univ/
米国の大学、コミュニティーカレッジ、大学要覧、および各地の認定機関へのリンク。

米国国務省は、他の機関・組織が発行する上記の各資料の内容および入手の可能性については責任を負わない。インターネット・リンクはすべて2005年11月現在有効なものである。

Steve Helber, AP/WWP
大学対抗スポーツイベントの人気の高さは、バージニア工科大学のスタジアムに集まった大観衆を見ても分かる。



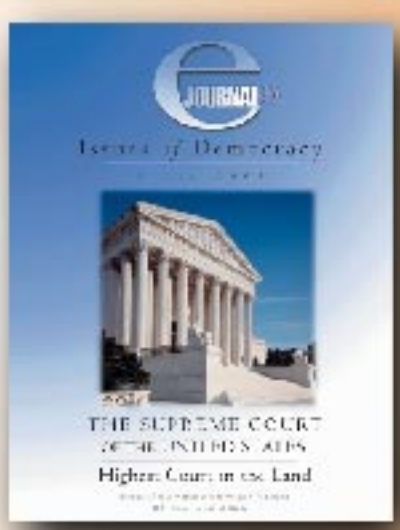




複数の言語で

発行する

月刊ジャーナル



eJournal既刊の一覧は、以下を参照してください。
http://usinfo.state.gov/journals/journals.htm